

平成29年(西暦2017年)01月

瞑想録(その17)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみにこれは科学でも学問でもありません。強いて分類すれば随筆です。科学が万能だとも思っていませんし、科学でない最大のポイントはここにあまたの思い付きについて証明を一切していないことです。私にとって証明行為と言う手続きはつまらない時間の垂れ流しに過ぎないので、気が向いた人にお任せします。既存の思想に凝り固まった人々との白兵戦は願い下げです。

なお内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。またこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

さらにこの一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2015. 11. 09

1、「家族と言う病」を読んだ

元NHKの有名アナウンサーで随筆家の下重暁子さんによる、50万部ベストセラーの「家族と言う病」(15年3月刊)を読んだ。まあ題名が内容のすべてを語っている。「家族は美しい」などと言う見え透いた大嘘は「親孝行は偉い」などというスローガンと同じく、儒教的イデオロギーを国家規模で強制する戦前の残滓で百害しかないという主張だ。そしてもっと現実に戻って現場を見るなら、「家族は束縛だ」とした方がよほど正鵠を得ていると主張する。

この主張には、「彼女の特殊事情を押し付けるな」とか「家族が崩壊したら日本の国の秩序が危ない」などと言う趣旨の批判も多い。金美齢さんによる批判本も現に出ているほどだが、50万部のベストセラーと言う事実が多分に普遍的な主張であることを物語っている。

瞑想録(その17)

私も下重さんの警告には大筋大賛成だ。私には親もいれば子もいて嫁様もいるが、特に子供に対しては「親が子にできる最大のことは邪魔をしないことだ」あるいは「金を出しても口は出さない」を基本にしている。すべて自分が子供時代に受けた嫌な教育や刷り込みを反面教師として、それでも単なる反動に終わらないように自分なりに人生経験の盛り付けをしたものだ。

下重さんは終戦時に小学3年生だった。軍人の父と忍耐する母の間で育ち、母違いの兄が一人いる。また「連れ合い」とか「パートナー」とか呼んでいるが、一般人の夫もいる。なお両親と兄はすでに他界している。子供はいないようだ。親戚としては義理の叔母のみが語られているが、その人もすでに他界している。

下重さんの「新」家族間観の原点は、軍人の厳しくてわがままの父、自立の素養がありながらあえて耐えることを選択した母、そしてその母が自分に向けた鬱陶しい程の「代理の」偏愛によって形成されている。これらの両親像は戦前の親の普遍的な典型例ではあるが、多少弱まったとは言え昭和の親つまりちょうどいまニートや引きこもり中年になろうという世代の親にも色濃く見えたものである。そしてこの不自然で迷惑千万な腐れ縁を、当時多感な少女でのちに早稲田を出るインテリの彼女は「世が愚かであることの根本」と見抜いたのだ。

下重さんは周りの友人や隣人等多数を仕事上の付き合いを通して垣間見て、「日本人は家族のことしか話題になくその大抵は愚痴ばかり」と突き放している。自分の夫との関係も互いに独立採算の「契約夫婦」であり、特に家事は夫の仕事という約束に基づいて結婚して今も守られているという。そして「気の合わない血繋がりよりも気の合った友達」を優先するのが幸せになり自分を開花できるコツと、多くの例を挙げて弁証している。

親の世間体第一主義や母親が父親の裏に回って自分の意見を権威づけて押し付けてくるずるさ、こういったものは私自身もいやと言うほど経験している。だから細部の違いはあっても私は彼女の主張や経験を、実感を持って自分化できた。タブー視されがちなことを「よくぞ書いてくださった」という気持ちだ。私は彼ら両親と刺し違えるほどに愚かではなかったが、「親をバット殺人した子」の気持ちは良く分かる。

この本を読んでいて私が思い出したのは、もう40年近くも前になるが千石イエスによる「イエスの方舟事件」だ。当時若い女性20人以上が親元を離れて自称牧師の千石剛賢と姿をくらました事件で、当初は洗脳とかハーレムとか誘拐などと騒がれた。千石は若いころ店の経営に失敗してテキ屋とか住み込み店員とかを転々としたために、

瞑想録(その17)

余計にそういう疑いをかけられたところである。だが事実が明らかになるにつれて、事実は娘たちの親からの逃避行であることが明らかになった。

事件がかなり解明されたところに確か木島則夫モーニングショーだと思ったが、千石グループと娘奪還を叫ぶ親族グループを別途呼んで隔離討論をさせた様子を見た。そこでの親族グループの主張はひたすら「このままでは恥ずかしくて世間様に顔向けできない」であり、司会の木島が「信仰と行動の自由は憲法で保障されています」とたしなめても「田舎はそういうことは通らない」とか「お前は犯罪者の味方か」を繰り返すだけだった。世間体のためとはすなわち自分のためである。

ちなみに千石が不起訴になった後も日本のキリスト業界は千石らを異端呼ばわりして、「聖書には親を裏切れとは書いてありません」などと自己保身するのみであった。そして逆に千石たちを擁護したのは野坂昭如をはじめとした文化人たち、やはり常識の矛盾をテーマにしてきたヒューマニストたちであった。千石の若いころの下積みも、それ故に怪しいのではなくて逆にそれ故に若い女性たちのために自分を捨てる包容力があったのだ。

話を下重さんに戻して自分や知り合いと重ねると、下重さんの主張自体は正しいのだが彼女がそれほど平均以上に苦労しているかと言うとそうでもない。両親はどちらもほぼ突然死で介護に苦労はしていない、母違いの兄とは当然ながら疎遠、子供もないので仕事と育児の両立に苦しんでもいない、どこにでも居る財産狙いのいやらしい親戚も全く出てこない、親の財産争いも経験していない、そして嫁姑問題も聞こえてこない。

客観的に見れば彼女はむしろかなり軽症なのだ。だが軽症であっても叫ばずにはいられない構造的な日本特有の病が、そこにはある。自民党の憲法改正案では第24条に「家族は助け合わなければならない」を追加し、その理想モデルとしてサザエ一家を使う等の動きが活発化している。

最後に彼女の本から、私として興味をひかれたエピソードを1つ紹介したい。彼女の自宅近くの河川敷にホームレスが住んでいた。そして何回か話を交わしているうちに、下重さんはその未知の世界に大いに興味をそそられた。それが当局の河川敷の強制撤去のためにある日行ってみると居なくなっていて、二度と会えなくなり寂しい思いをしたという。そして回顧するに「ホームレスが一番しがらみなくて幸せだ」と感じたという。賛成である。

2、知能機械とベーシックインカム制

ベーシックインカム(以下「BI」)と言う制度がある。働きに寄らず全員一律に賃金と言うか生活費を無条件に支給しようという考え方で、実施している国はまだないがスイスが検討中だという。まあいわば「逆人頭税」みたいなものだ。その金額にも依るが理想的には、「国民は最低限度の生活ならばBIのみで生活することができそれ以上の贅沢をしたい人だけ働けばよい」というシステムである。

このシステムが施行されれば例えば芸術家志望の人などは、自分の芸術のための材料費分だけちょっとバイトをすればあとは制作に専念できることになる。つまり単に生活保障の安心感だけではなく、文化促進にも大いに役立つことが期待できる制度だ。ただ問題は財源である。BIの為にどこかからお金が湧いてくる訳ではない。だからBIとは別の面から見れば、単なる富の分配方法の変更に過ぎない。

ある試算によると全国民に月に8万円のBIを分配するには、国の財政赤字等を見れば消費税率を現行の8%から45%に引き上げればできるという:

<http://www.ab.auone-net.jp/~bincome/BI-ZAIGEN.htm>

この8%から45%、あるいは将来を見越して13%から50%と言う数字が大きい小さいか、その感じ方はそれぞれの人々の生活の仕方と人生目標で異なってくるだろう。

ところで世の中の商品の生産方法が日進月歩で進化しあるいは知能化して、人による労働のかなりの部分が現在進行形的に機械にとってかわられているという現実がある。先日もある大手ビール工場を見学したのだが、生産システムは醸造から封入まで全自動化されていて工場内に工員は1人も見えなかった。もちろん不都合時とか定期点検時には人が入るのだろうが、普段はむしろガードマンの方が多いくらいだという。おかげで酒類はその半分を税金として、実質100円もあれば気持ちよく酔えるほど安価なのだ。ビール瓶を一々洗浄していた昔に比べれば、雲泥の差である。

そして同様の自動化はこのような単純作業だけでなく、つい最近まで専門技能と言われて何年も修行して取得するような熟練技術にまで及んでいる。衣類など千円以下で普通にあるし、写真も電話も何もかもスマホ1つで済んで月に数千円程度だ。そしてこの「5年ひと昔」と言われる時代の言わば副作用として、それまでの熟練工が道半ばで失業するという事態も発生している。人間国宝級の業師は別にして、「町の技能者」レベルの個人営業主が結構中年で倒産しているが、そうかと言って今更計算機言語の習得と言うわけにもいかない。単純労働のパート労務者や霊園のホームレス

瞑想録(その17)

等も、聞いてみると「数年前までは畳屋だったとか時計屋だった」などという人が結構いる。

もっともこういう現象は今から250年ほど前の産業革命の時にも起こっており、組織的な機械破壊運動であるラッドライト運動が盛んにおこなわれた。この教訓もあってか30年ほど前に新聞製作が組版から自動写植に代わるとき、新聞社は時間をかけて組版工に全く畑違いの機械操作員になってもらい、機械への逆恨みとそれに伴う社員の士気低下を防いだという話が語り草になっている。でもこれは大企業だからできたことであって、個人の和菓子屋や洗濯屋はどうしようもない。

だが逆に約200年前のラッドライト運動、当時の主要な標的は自動織機だったが、これが今も続いているかと問えば答えは否だ。結局労働分布の再編成ができないのはその世代に限られており、次の世代はもはや時代にあった職業を自主的に選んでいく。だから今日洗濯屋や畳屋が受難だからと言って次世代にはそういう職業が元々ないだけの、きわめて一時的な事象なのだ。

そして他方で生産システムがますます精密化し知能化していった、人に基本の最低限の衣食住すべてが自動機械によってすべて生産できてしまったらどうだろう。もちろんそこには材料費とか生産電気代とかが現実にはあるのだが、今に比べれば無視できるほど極めて僅かだ。おそらくその時代になれば、最低限の衣食住は無料で提供されるようになるだろう。ある意味マルクスの予言した共産制の、本当の実現だ。

以上を総合すると産業革命や機械知能革命は中長期的には人を労働から追放するのではなく逆に開放する方向に働く、きわめて歓迎すべき事象なのだ。真の増税を伴わないBI制と言って良いだろう。パラダイスな全員貴族の時代の到来だ。冒頭で紹介した消費税が50%と言う試算例も、生産手段や生産効率が現状のままであった場合と言う暗黙の過程があったことに注意すべきである。

あとは「その時機械が人を奴隷にしないか」と言うよく言われる心配だろうが、機械は再現できても創造はできないので、この心配は杞憂だとあるいは単なるSFネタだろうと私は考えている。

3、トランプと言う選択

瞑想録(その17)

先日の米国の大統領選挙では、大方の予想に反してトランプ候補が勝利した。私自身もヒラリーの勝利を予想して、「ヒラリーと言う選択」と題する記事の荒筋を事前に用意していたほどである。

そしてそこで用意したヒラリーの勝因とは、

- ・米国民は単細胞なのでヒラリーの口車に簡単に乗せられる、
- ・ヒラリーは小利口なので戦略的に「最後の隠し玉」を持っていてそれは女性問題、この球は必殺でかつ話の真偽なんかどうでも良い、
- ・人口の半数は女性でありその大半がヒラリーに投票する、
- ・トランプの支持層は教養のない白人だが、もはや米国は白人国家ではない、
- ・人は奇抜な物には面白がるが、買うときには無難な物を買う物を傾向がある、であった。

断っておくと、私はヒラリーに当選して欲しかった訳ではない。極端に言えば、ヒラリー以外ならどんなぼんくらでも犯罪者でも良かったほどだ。理由は彼女のさも利口ぶった、でも実は一皮むけば他人をバカにした狡さでとあざとさの塊だからだ。ヒラリーの敗因としてしばしば「賢い女は嫌われる」が言われるが、少なくとも私の場合はそうではない。小池百合子とか片山さつきとか、賢い女性たちだが好ましいと思っている。

ヒラリーは「大統領になっても皿洗いは自分でやる」などと、庶民性をことさらにアピールしていたが白々しい。「夫婦で大統領はいかがなものか」と問われて直ちに「ブッシュ親子が悪いのよ」と返せるほどの口先の小利口な人格とは、およそ違和感がする。こういう見え透いた嘘を平気で言う性格が私は嫌いだったが、私の知る米国の友人はことごとく単細胞なので「おそらく彼らは騙されるだろう」と思っていた。

男だろうが女だろうが、私はヒラリーのさかしらが嫌いなのだ。日本にとって好都合か否かは別として、選挙結果は良くも悪くも正直なつまり本来の米国人らしいトランプの方であった。私自身は自分の予想の外れを喜んでいる。そのヒラリーの敗因についてはいろいろ取りざたされている。最後のFBIの捜査が効いたとか、米国民に中央政府への不信があったとか、トランプの攻め込む態度がヒラリーの守りを破ったとかだが、これらについてここでまとめることはしない。

元に戻って冒頭で私が挙げたヒラリーの勝因のうち、どれが間違っていたのだろうか。第一にトランプの最悪に対してヒラリーは最低と呼ばれていた。さすがに米国人もそこまでお人よしではなかったのだ。第二にトランプは選挙寸前までどうしても大統領にな

瞑想録(その17)

りたかったわけではなく単に言いたい放題をしたかっただけなので、戦略などなく最後の隠し玉も用意していなかったが、FBIがこの役割を果たしてくれたのはラッキーだった。

それにしてもヒラリーが敗北と言うことは、彼女の票田と目された女性と非白人のかなりが実際はヒラリーに投票しなかったということだ。計算高いヒラリーにとってはこれが最大の誤算だったのだが、どういう年齢層がどういう理由でヒラリーを嫌ったのか知りたいものだ。また事前予測でのヒラリー優位が外れたことについて、民主党寄りのメディアのサンプリングが作為だったせいだと言われているが、これはないと思う。作為をするなど返って面倒だ。おそらく回答者が自分の本心を、禁忌が作用して正直に言わなかったあるいは言えなかったのではないか。

日本は世間体とか近所の目とかがうるさくて自由のない国であるが、では米国が何でもありの自由な国かと言うとそうでもない。人種差別用語はダメ、暴力用語はダメ、不平等な言葉はダメ等々で、ひたすらに寛容を装うことが実質的に義務付けられていて、好きなことなど言えないのだ。だからR18の映画で暴力シーンを見てすっきりする日々なのだ。人事採用でも明らかに劣っていても有資格者を優先せざるを得ない。後でねじ込まれるからだ。

そしてこのわざとらしい寛容、これが米国を弱体化させていることに米国民は気付いている。何とかしたくて前回は黒人のオバマを選んでみたが、彼の「チェンジ」は言葉だけで何も変わらなかった。そもそもあんなオカマみたいな人物が変えられるほど、米国の今の硬直化は並みでない。ヒラリーを選べば小利口な彼女はより優雅な衰退曲線を描いて見せてくれただろうが、そんなことを今の米国民は一つも望んでいないのだ。

今の米国人は本音を大声で言いたいし、建前と格好付けの寛容さなどかなぐり捨てたいのだ。米国はそもそも内外不干涉のモンロー主義の国であって、この主義を辞めたとは言っていない。日本の外務大臣と会談するのは国務長官であって、米国で外交とは国務の一環なのだ。米国が中東やアジアに介入するのも結果的には世界の警察になっているかもしれないが、本来は自国のエネルギーや自由主義を守るための極めて利己的な行動である。だからトランプの「大盤振る舞いはやめようぜ」は「本来の米国に返ろうよ」という呼びかけであり、これが受けた。

思い出してほしい。200年くらい前のエネルギーあふれる米国は、今のような変に行儀の良い米国ではなかった。西部劇に出てくるビリーザキッドとかデイビークロケットとかブロンコとかシャイアンとか、あるいは西部の悪徳シェリフの無法地帯やゴールド

ラッシュに群がる人々とか、これらの先達は皆トランプのような粗野でいかがわしい人物ではなかったか。日本の戦国時代だってそうだ。うつけと言われた織田信長や盗賊上がりの蜂須賀小六や元祖下剋上の松永久秀等、活気ある時代の主人公はどこの時代でもみなトランプだった。

結局こういう雰囲気盛りが上がって米国人はあえて、凡庸な物よりもとても悪いかとても良いのか分からないがとにかく「とても」と言える奇様な買い物を選んだのだ。つまり冒頭の私の予想で言えば最後の、「変わった物には面白がってもいざ買うとなると無難なものにする」と言う法則が、今回は一番間違っていたのだろう。

4、聖書信仰

キリスト教の牧師に聖書信仰と称する一群が居る。すべての善悪や正否を「聖書という本に書かれているか否かで決める」という信仰形態だ。彼らに「もしイエス様が約束通り再臨をして聖書と違うことを言ったらどちらが正しいのか」と聞けば、迷うことなく「聖書のほうだ」と答えるだろう。ちょうど聖書をネタに裁判や法律解釈をやっている感じだ。これはなかなかこれ以上ない「死んだ宗教」である。聖書信仰が正しいなら同じ根拠で「コチカメ信仰」だって正しい。

韓国にキム・ギドンと言う異端のキリスト系教祖が居る。言っていることがむちゃくちゃでかつ愛のかけらもないので、異教徒の私にも彼が異端であることは分かる。彼の語録に「人は誰でも120歳まで生きられるのだが、罪の積み重ねで寿命が減った」という言い分がある。これは「寿命の短い人ほど罪深い」と言う愛と正反対の意味を含んでいて危ない。だが聖書信仰牧師がこの主張が間違っていると断ずる理由はひたすら、「聖書のどこにもそのような記述がないから」である。愛の有無は彼らにとっては二の次なのだ。

彼らの主張には否定しにくい面もある。教祖様が生きている間や死んで間もなくならば、その正しい教えは教祖様に直接聞けばよいし生きた思い出の中にある。ところが100年も経って3代も代替わりしてしまうと、誰も生きた教祖様を知らない。そうなると勝手な事を言い始める人が出て、誰も禁止する権威がない。そこで書かれて固定された聖書を唯一の規範にするのが、消去法で言って法灯を正しく伝える唯一の方法だと言うわけだ。

まあ宗教の歴史を見るとどの宗教でも、ひたすら教祖の教えを伝達するのが承継した聖職者の最大の仕事である。これはキリスト教に限らず仏教だって神道だって全部

瞑想録(その17)

そうだ。ただ何を伝えるかを間違えると硬直した死んだ宗教、人を救うのではなく人を縛って殺す宗教になる。ユダヤ教におけるパリサイ人がその典型で、イエス・キリストは実にこの形式主義の打破に命を懸けたのである。この観点からは聖書信仰は最大のパリサイ人だ。

儒教においても最も忌み嫌われたのは「論語読みの論語知らず」であり、仏教では「仏に会ったら仏を切れ」と教えている。また読書だけで実践のない禅は「理論禅」と呼ばれて、軽蔑の対象だ。要するに表面論理を伝えるか実践を伝えるかが、大きな分岐点なのである。日本の高僧の一休宗純は破戒僧で、酒を飲んで女を囲ったがそれでも大徳寺の管長を長く務めた。思うに日本仏教を硬直から救ってくれた最大の功労者は一休さんであろう。キリスト教には残念ながら「一休さん」が居ない。

「ポー川のほとり」と言う題の話題の映画がある。10年前のイタリア映画で、日本では岩波ホールで上映された。ストーリーは以下のようなものである。ある日最高学府のボローニャ大学でキリスト教関係の古文書がすべて破壊される事件があった。犯人は最も嘱望された若手の助教授であった。彼はすべてを捨てて貧民の住むポー川のほとりに移り住み、近隣住民の悩みを聞いてはそれに寄り添い、いつか「キリスト様」と呼ばれるようになっていく。ところがある日当局が河川敷を規制して、その元助教授を追放してしまう。人々はキリスト様がきつといつか帰ってくるだろうと、道に光をともし彼を待ち続けるのだった。

この映画はバチカンのおひざ元であるイタリアでも「問題作」として議論を呼んだので、欧米でもキリスト教の聖職者とは千年一日のごとくに変わらぬ儀式を繰り返して何も気づいていないのかもしれない。キリスト教が根付いていなくて無くなっても誰も困らない日本では、もっとダメなことだろう。異教徒の私にも、こちらの元助教授の方がよほどイエスに近く見える。

もう一つ話を紹介する。こちらは漫画で、さいとうたかお先生の代表作「ゴルゴ13」の第98話の「聖者からの依頼」である。フィリピンのある村で人々に「生けるキリスト」として慕われているオーハラ神父が居た。そのオーハラ神父がゴルゴに、かつて村を襲ったギャングのボスの暗殺を依頼する。そして数日後、オーハラ神父が撃たれて死んでいるのが見つかる。村人は知らなかったのだが、オーハラ神父は実は元ギャングのボスだった。村に隠れて神父のふりをしているうちに回心してしまい、村人が真実を知って落胆しないやり方で自分の処罰を依頼したのだった。

瞑想録(その17)

この話も作り話ではあるがキリスト教の何たるや、つまり聖職者のすべきことは口先でなく行動と実践であることを雄弁に語っている。イエスが公生涯で何をしたかという原点に返れば、当然にこういう「自分を捨てての破戒行為」に出るだろう。だが私の聞き知る牧師はみな良くて頭の固い聖書信仰型で、もっとダメなのは基地反対とかのプロ市民に明け暮れている。

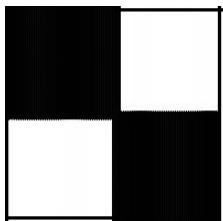
以上2つの物語で象徴的にイエス様の真の業績を、聖書信仰との対比で示した。最後の例は生きた例で、聖書信仰牧師たちがウジ虫のように嫌う千石イエスである。彼については数日前の記事でも取り上げたが、今も残っている彼の動画は寝転んでせんべいをかじりながら聖書を読む姿である。この態度だけで聖書信仰牧師たちが千石を嫌うには十分であるが、思うに心の底での理由は「信徒のためなら自分を捨てる」というキリスト的態度において先を越されてしまったからである。本家を取られたことにこの時気付いたのだ。

千石イエスは家族関係で悩む若い女性20名とともに姿をくらまして、逮捕状まで出る騒ぎになった。聖書信仰牧師でここまでできた人が1人でも居ただろうか。欧米人はイエスをイケメンの白人に描くが、現実のイエスは方言丸出しの大工で実質本位だ。千石剛賢の方がよっぽどリアルな「生きイエス」に見えてくる。

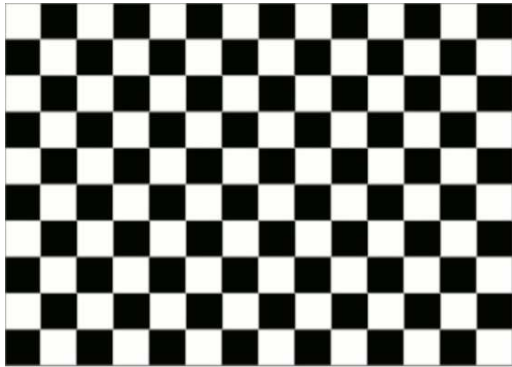
どの宗教でも教祖の美化はあるが、その美化の陰に隠れてこっそり安楽や保身をする牧師たち、もちろん彼らにも「我々にも生活がある」と言う主張があり、それは否定しない。かつて日教組の楨枝委員長が展開した「教師は聖職でなくサラリーマンだ」運動だ。イエスさんが体よく座敷牢に入れられて泣いているのが見える。

5、市松文様

市松と言う文様がある。必ずしも日本固有ではないのだが、日本では特に愛されて多用されている。基本的に下図(上)のような白黒の正方形の交互を基本単位として、これが2次元方向に無限に広がった文様である:下図(下)。



瞑想録(その17)



本来の市松は完璧に基本単位の繰り返しであるから、結晶構造と同様に数学的である。しかし他方で一般に「市松」と言った時にその種類は1種類でなく、むしろ無限種類のバリエーションを含んでいる。もちろん変形が大きなバリエーションの場合は、適宜別の名前がつくこともあるが。

まず基本単位の大きさに自由度がある。大きくて着物1枚に数単位しかない市松もあれば、江戸小紋のように楊枝ほど細かい市松もありうる。次に市松の色だ。白黒の対を原則とするが赤と緑だって良い。これだって繰り返していれば市松で、数学的でもある。さらに繰り返しとその単位が水平垂直でなく斜めに、例えばX字に交差する形の市松もありうる。Xでなくても自由な交差角で傾いて良く、これも繰り返しである以上数学的だ。

さらに各四角形を長方形やひし形や平行四辺形にする、あるいは黒だけ膨張して大きくする、さらには四角形の辺を規則正しく曲線にする、いずれもかなり市松でありかつ厳密に数学的である。さらに2X2単位の市松を2X3とか3X3単位にするという拡張もあり得る。依然として数学的だ。

続いて市松をドンブリのような曲面の内側あるいは外側に張り付けてみよう。基本的に極座標の市松であり、厳密には平行移動合同ではなくなる。つまり中心に行くほど小さくなるものの依然押して規則正しくかつ市松と認識できるので、かなり数学的な市松と言える。と言うか逆にこの程度の規則性まで群(繰り返し)を拡張出来たら、数学がもっと発展できるように思う。

続いて逆にドンブリに市松を、中心から始めて周辺のほうに拡張していこう。すると市松の四角形が大きくなるのでデザイン的には市松の1つの四角を四分割してそこに市松の1単位を入れたくなる。ある所から市松が倍になるのだ。これだって面白い分だけ数学性は減るが依然として市松である。このように市松の入れ子も市松だ。

瞑想録(その17)

市松が束縛を離れて自由になりついでに、東京オリンピックのシンボルマークを見てみよう。かなり変形され部分的には市松以外の要素も補助的に入ってもはや繰り返しや数学とはみなせないが、それでもこのデザインのモチーフは市松であると認識することができる。市松概念の中心よりかなり遠いが依然として広い意味での市松文様と言える。



続いて市松の個々の四角の内部を、単色を離れていじってみる。例えば入れ子にしてみるとかサンドイッチのように3本層にしてみるとか、こういういじり方は内部構造もかなり対称性がある味な市松になる。以前に「吉野家のドンブリ」と題した記事の最後で触れたような、フォークダンスの各フィギュアの素朴な部分対称性に通じるところである。

ちなみにこの拡張を基準視点として本来の市松を観ずると、その内部構造は単一色の自明である。だから本来の市松文様が依然として一番高い対称性にある。この観点を徹底すると、布が文様なしの単色モノトーンである場合が一番高い対称性を持つことになる。これはその模様の布が面白いかどうかは別として、その通りである。

また市松自身ももっと基礎的にドミノの交代対称と見ることもできるが(下図)それもその通りである。ただし結晶構造でも良くやるが、デザインとしては市松を基本単位としてまとめてとらえた方が認識しやすい。またさらなるバリエーションとしては、市松模様の旗をなびかせるとかマクロにグラデーションをかけるといったことも考えられる。



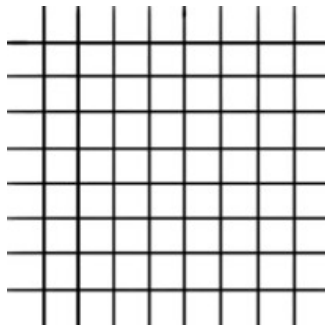
次に市松の各四角の内部に図形ではなく形象的デザイン、例えば竜とか桃とかあるいは漢字とかを入れてみる。「冬」と言う字を入れてみるともはや内部対称性はない

瞑想録(その17)

がそれでも繰り返して入れればかなり対称性の高い市松である。あるいは市松の基本単位の4つの四角に順に「春夏秋冬」(四季)とか「玄青赤白」(四神)とか入れてみると市松基本単位内部での対称性さえ失せてしまうが、それでもこれら4文字には意味上の結合があり、一種の対称性とすら言える。これを単位に繰り返しても市松である。

さらに入れる漢字を無意味に違えてみるとか無順序な花のデザインにするとか、あるいは市松の四角の格子を無視してマクロに法相華(ほっそうげ)のデザインを入れてみるとか、さらに市松を半透明にして薄くするとかいろいろ無限にありうる。ここまで行くとそのデザインはもはや市松と呼ぶより、より印象の強い「風神雷神」とか「竜と鳳凰」とか「法相華紋」と呼ぶべきだろう。だが市松と言う幾何的規則的文様の名残すらないかと言えばあるのであり、これが抒情的物語の絵に良い統一性を与える効果を醸し出す。

今度は逆に市松を四角の集まりと見ずに、今までは黒子であった境界に注目して縦横格子にしてみよう。この発想の転換はクイズや謎解きと同じで頭の柔らかさの尺度である。この格子縞もやはり単純繰り返しで数学的であり、これまでに本来の市松文様で施してきたような変形手法はすべて使える。その極まったものがタータンチェックである。

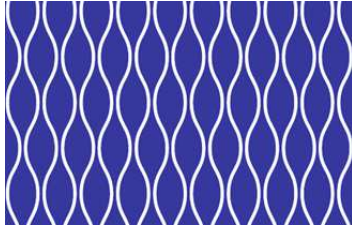


これらはさらに煉瓦文様にもでき、煉瓦の色は最近マンションの外壁に流行っているようにわずかな色違いを規則性もないが偏りもないマダラに入れることもできる。ここまで行くと数学的規則性はかなり薄れるが、デザインのモチーフとしては理解できる。さらに石垣にすることもでき、石垣も規則積みから乱積みに行くと、もうここまで来たら市松は認識できない。

面白い例として、別の名称で認識されている文様がちょっと見方を変えると今扱っているジャンルに近づくことがある。下の文様は「立涌」(たてわく)と呼ばれて湯気が立

瞑想録(その17)

っているところを文様化したものであるが、この文様の場合限りなく斜め格子に近いとみなすことができる。発想の転換である。



本日はこうして、文様に見える数学性について概観してみた。

6、結び目(ノット)の話

先日東横線で自由が丘駅に差し掛かったら、亀谷万年堂の本社が見えた。王選手による「ナボナはお菓子のホームラン王です」で有名な和菓子本舗だ。そしてその家紋(社紋)を見た時に「あれ?」と思った(下図)。



亀屋だからモチーフが亀甲なのは良いとして、その交わり方が尋常でなく複雑に交差しているのだ。この交差の仕方は単なる三葉結び(クローバーノット、下図)とは微妙に違うのだ。三葉結びは最もありふれた結び方だが、閉じているときはあくまでも1本の紐だ。ところが亀屋の家紋は3つの閉じた輪が互いに平等にしかも外れないように結ばれている。



単に3つの閉じた輪を結ぶだけなら鍵の束のように大きな輪に小さな輪を2つ下げればよい。結び目も3つだけだ。だがこの場合は3つの鍵が平等でない。つまり大きな輪を切ると全部バラバラになるが小さな輪を切ってもバラバラにならないのだ。亀屋の場合は平等(回転対称)で、しかもどの1つの輪を切っても全部バラバラになってしまう優れものなのだ。

この結び目を西洋ではボロミアン、日本では三ツ輪違い紋と呼ぶ。いずれも家紋が由来で、2次元では実現できないが3次元では実現できる。構成する個々の輪が固く真円でなければならないといった条件を加えると3次元にも埋め込めないのだが、緩くて良ければ元の輪が1次元だから3次元には収まる。この家紋はその2次元への投影である。

さて、ボロミアンの場合その交点はいくつだろうか。次のように計算すると早い。亀の子1つを見ると4か所交差があるので単純計算だとその3倍で12か所となるが、この数え方だと同じ交差を2回重複して数えているので正解はその半分の6か所である。

結び目は結び方さえ同じなら大きさや結び位置等の違いは無意味だから、典型的な低次元トポロジー(位相幾何)である。しかも3次元内の1次元と言うことで、おそらく一番単純な位相幾何だろう。ところがこの分野はなぜか切れの良い統一理論がなく、結局は結晶構造のように個々の結び目を名前で呼ぶことになる。分類の仕方としては結び方をできるだけ簡略化した上で、①閉じた輪の数(「 $\bigcirc\bigcirc$ 」なら2)、②各輪の穴の数(「8」なら2)、③交点の数でほぼ決まる。これらの指数の1つでも違えば別の結び目(連続変形で到達できない)になるのだが、これらが同じであっても結び目としては別になる場合がある。

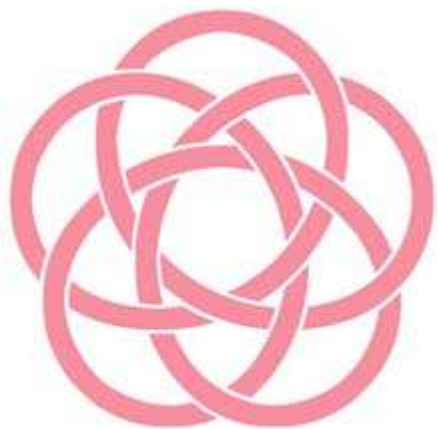
瞑想録(その17)

例えば今上に挙げたクローバーノット、その鏡対称はどうやっても元のクローバーに変形一致できないので違う結び目と数える。一般に複雑なほどつまり今上に挙げた3指数が大きくなるほど「異性体」が増えるのだが、ボロミアンの場合はクローバーよりも複雑なのに鏡対称は自分と同位相になる。こういうところが結び目の味わい深い点の1つである。

ちなみに輪違紋は輪が3つの場合だけでなくいくつであっても作れるが、形が複雑すぎて絵にかくのがどんどん大変になっていく。またクローバーも輪が1個で結び目を増やそうとすれば、交点3以上でいくらでも増やすことができる。穴が2つの8の字の2つの穴を牛の鼻輪のように結べばまた新しい結び目ができてかつ鏡像同相である。

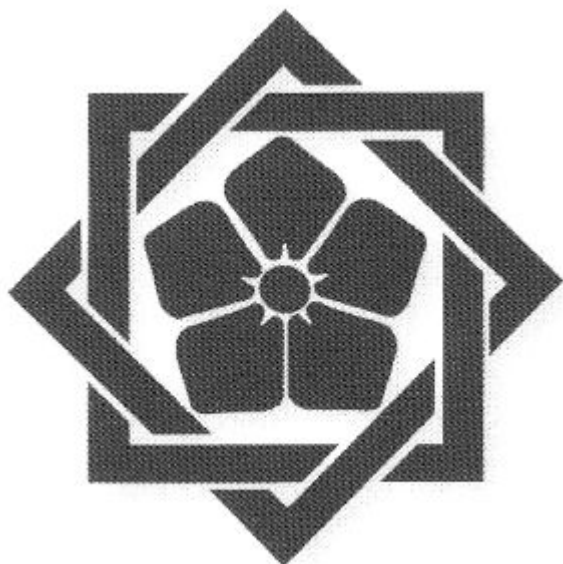
やはり最近街中で見つけたのだが、「ヒガシヤ」と言う高級和菓子屋兼喫茶の家紋がまた変わっているのだ(下図上)。家紋業界での呼び名は分からなかったが、この家紋の中の結び目は3つの輪が変にねじけながら反対側の2つの頂点を結ぶ形でできている。ちなみにこういう結ばれ方は頂点が偶数だから出来ることで、頂点が奇数だと輪の数は1つになる(下図下)。この辺は一筆書きに類似の構造となっている。





以下では話を簡単にするために、穴の数が1つの場合のみを考える。輪を繋げてもっと単純な形を作ろうとすると、オリンピックの五輪マークがある。これの両端の輪を繋げて全体として丸くすれば、立派に対称な結び目である。一般に交点の数は輪の数以上になる、と言うことは交点の数と輪の数が等しい結び目がある意味最も単純な結び目になる。そして閉じた五輪マークがその例である。単なる鎖つなぎだ。

有名人の家紋で幾何的に傑出しているのが、坂本龍馬の家紋である(下図)。これも家紋の正式名称は分からなかったが、四角(輪)が4重に重ねられていてある意味入れ子を連想させるものである。ここまで行くとエッシャーのだまし絵の世界を連想してしまう。



このようにデザイン的に楽しい知恵の輪である結び目であるが、単に楽しいだけでなく今年のノーベル化学賞はこういう分子を合成した先生方に与えられている。したがっ

瞑想録(その17)

て分子スイッチに応用先があり、さらには素粒子論とも関係が出てくると言われている。また歴史的には家紋のデザインのほかにも帝国海軍で艦綱(ともづな)の結び方として教科になっていて、江田島に行くとこのデザインの手拭いがお土産で売られている。

本日は数学と芸術の接点の一例として、結び目の世界を覗いてみた。今回の一つの教訓としては第一に設定が単純だからと言って理論も単純とは限らないこと、第二にデザインとして奥深そうに見えるものほど数学性は薄れるという点だろうか。

言い換えれば世の中の数学的な物のうち、現在の数理科学はたまたま完全な式や一般則が存在したきわめて偏った部分しか解明していないしする気もないということだ。数理科学者はすべての真理の乱麻を断つ白馬の騎士ではなく、一攫千金狙いのならず者に近いということになる。都合の悪いものは「病的」のレッテルで外しておいて「美しい理論が見つかった」、それはないだろう。

7、俳人金子兜太

俳人の金子兜太(とうた)さんは現代の異形の俳人である。大正8年に埼玉県秩父の生まれで現在96歳、文化功労者である。俳句は俳聖の松尾芭蕉に始まり小林一茶、与謝蕪村、正岡子規、種田山頭火等多くの偉大な先人によって開花して今に至っているが、現代と言う切り口のみならず今列挙した偉人に並びうる俳句功労者として私は金子先生を挙げたい。

金子先生は東大卒業後日本銀行に入行、エリートの道を歩むかと思われたが組合運動に身を捧げて別の道を行った。その原点には先の戦争で招集されトラック島で九死に一生を得、捕虜生活ののちに帰国したという過酷な体験がある。だがこの体験は単に過酷だっただけでなく、季節の移ろいも草花や四季自然も全く異なった南洋と言う貴重な体験ともなっており、これらと先生本来の才能が全部混ざって俳人金子兜太が完成したとみるべきである。

先生のすごさは何といっても五七五の言葉の選び方と結び方にある。常識ではおよそ結びつかない言葉が結びつき、だがデタラメではなくしっかりと1つのメッセージをまず音として強烈に発している。先生の句は難解だと言われるがそれは理性において難解なのであり、一幅の絵と思えばメッセージは強烈である。だから先生の句を解説すればするほど、ネタバレした推理小説のように白けてしまうという難しさがある。以

瞑想録(その17)

下に代表的な数句を、簡単な解説とともに列挙する。なおMSワードのエラー回避のために旧仮名遣いを数か所改変してある。

・蛾のまなこ 赤光なれば 海を恋う

先生二十歳前の句だ。蛾の目は赤い。それは良いが問題はなぜ「海を恋う」のかだ。敢えて理屈をこねれば赤と青の対比だろうか。これも絵として見るべきだ。

・バナナの葉 へし折り焼夷 弾叩く

トラック島の句会での句。焼夷弾とか実戦の様子がリアルである。バナナは一応夏の季語であるが、金子さんの場合はバナナの実でなくバナナの木である。いかにも南洋、こういう作句が先生の幅を異次元に広げた。

・樹海の果 白照るリーフ 見えるのみ

季語は「照る日」で夏か。南洋だから常夏で、季節も違うし季語などと言っていられないのだ。情景としては南洋の島々そのものである。戦時の一時の風の静寂か。

・なめくじり 寂光を負い 鶏のそば

ナメクジが何気に白く光る、夜であろう。なぜ鶏のそばだと絵になるのか。現に絵になっているのではないか。あたかも速水御舟とかその時代の扇面図のように。

・雪山の 向うの夜火事 母なき妻

上五七は具象で色の対比も鮮やか。それがなぜ下五に繋がるかというと、戦火による縁者の死を思い出し重ねているからだだろう。これも戦争体験の追憶。

・夜の餅 海暗澹と 窓を攻め

季語は餅、季節は新年でなく冬になる。上五七は寂寥としている。おそらく餅をもらって夜の海沿いを帰宅の途上だろう。この句の手柄は最後の「攻める」にある。小さな団らんをも海は非情に攻めるのである。荒涼としている。

・わが湖(うみ)あり 日蔭真ツ暗な 虎があり

心の中には広大深遠な青い海がどっしりとあり、そこには同じくらい広大な暗闇があって虎が住んでいるように凶暴だ。心の内面を歌った句だが、きっかけは山中湖畔の実の光景にあり、連想の深さが半端でない。

・霧の村 石を放れば 父母散らん

瞑想録(その17)

秩父の山奥に育ち父母とも複雑な関係にあった作者の、故郷と両親に対する複雑な愛憎を描いている。「魚群の如 虚栄の家族 ひらめき合う」の句もある。

・谷に鯉 もみ合う夜の 歓喜かな

無季の句で、黒い鯉が見えにくい夜中ではあるが川で激しくもみ合っているとの意味の動的な句、エロティシズムの隠喩だという解釈もある。この人に無季の句が多いのも、季節の全く違う常夏の地の原体験の故であろう。

・赤い犀 車に乗れば はみだす角

赤い犀など居ないし何の例えかも不明だが、異才の画人の伊藤若冲だったらこのような絵も描くのではないか。一見の意味不明に意味があると言っても良い。

・列島史 線路を低く 四五人行く

下七五は目前の具体的情景、対して上五は長大な抽象、このおよそ異質な2つを合わせるところに金子先生のすごさがある。おそらく「歴史も無名の個人の行為の膨大な積み重ねだ」という感慨か。戦争体験にもつながる。

・富士たらたら流れるよ 月白にめりこむよ

全くの破調である。この人も破調は目立つが、実験的な感じも受ける。句意も理屈でなく、「夜中に富士山を見上げたら薄白い月の光輪が富士山を輪郭しながら流れ落ちてくるかのようだ」の意。

・梅咲いて 庭中に青鮫が 来ている

冬明けの早春で庭はまだ開花前の荒涼とした景色だ。それを見ているとまるで狂暴な鮫が踊りくるようだと言ふと金子さんは読む。凡人ではありえない発想の豊かさがある。強引だが心情を理解できる。

・酒止めようか どの本能と 遊ぼうか

老境に入り持病を持ち、医師に禁酒を言い渡された時の句。酒を自分は本能で飲んでいる、ほかに楽しい本能なんかないのだよ。寂しく戸惑う気持ちがちょっと諧謔。

・長生きの 臍(おぼろ)のなかの 目玉かな

長生きしてきて振り返るとすべては臍なのになぜか目玉が冴えて見える。何の目玉かは判然としないが、終生故郷の秩父を愛した先生の、その秩父の守護神でヤマトタケルを導いた白いオオカミの赤い目玉かもしれない。

以上です。

8、ペルシャ断想

2月ほど前に、「奈良時代の平城京跡からペルシャ人の役人が居たことを示す木簡が見つかった」とのニュースが流れた。ペルシャを意味する「破斯」(はし)の文字が確認されたという。これは日本古代史ファンとしては第一級の発見である。

http://www.huffingtonpost.jp/2016/10/05/nara-heijyou-kyu-persia_n_12349792.html

平城京はそもそも唐の都の西安をモデルにして作られた都であり、特に聖武天皇はやマトの国際化を目指していた。だから外国人の往来があってもおかしくないのだが、当時はどちらかと言うと遣唐使のように出かけるケースが多かった。だから外人それも中国より遠いペルシャの人が日本で役人として定住していたという事実は、なかなかの広大なロマンである。

ペルシャは今のイランにあった国で、文明としてはメディア王国、アケメネス朝、アルサケス朝、ササン朝と続いた。このうちアケメネス朝は現在世界遺産となっているペルセポリスを首都とし、マケドニアのアレキサンダー大王によって滅ぼされている。またササン朝は7世紀半ばに、アラブに勃興した異教徒のイスラム勢力によって滅ぼされた。この時に相当のペルシャ人が国外に逃亡したことは想像に難くなく、その子孫が約1世紀後に奈良にまで至ったのであろう。シルクロードを、三蔵玄奘とは逆の道ではるばる渡来したことになる。

ペルシャ人は本来インド・ヨーロッパ人の支族のインド・イラン人の内のイラン系で、実はその活動範囲は今一般に知られているより広い。そもそもシルクロードの担い手の一つでもあったし、古くは紀元前8～3世紀に南スラブに勃興したスキタイ人も、安祿山はじめ中国に多く居た商人に多いソグド人も、最近グルジア紛争を起こしたオセチア人も、さらに仏僧の高僧の鳩摩羅什(くまらじゅう)を出したキジ国も全部ペルシャ系である。楼蘭(ろうらん)から出土した女性ミールも明らかにペルシャ系だ。

平安時代に源氏物語とほぼ同時代に書かれてかぐや姫伝承のひな型になったといわれる「宇津保物語」にも、主人公の先祖がペルシャからこの上なく良い響きのする琴を持ち帰ったというエピソードが入っている。また正倉院御物にもペルシャ起源のものが結構あり、瑠璃杯はとくに有名なほか螺鈿琵琶なども残っている。

だからおそらく渡来くらいはあったとは思うものの、あたかも遣唐使の阿倍仲麻呂が唐の皇帝に仕えて安南都護府の長官になった如くに、日本の官人として定住してい

瞑想録(その17)

たほどに深い交流があったことは特質すべきである。願わくは彼の肖像とか個人史などがあるともっと面白いのだが、さすがにこれらについては歴史のかなたに忘れられて永遠に掘り出せないだろう。

そもそもペルシャ人は世界宗教であったゾロアスター(ツァラツストラ)教と、その聖典であるゼント・アヴェスタを生み出した民族である。ゾロアスター教は世界史の展開を善神アフラ・マズダと悪神アーリマンの永遠の戦いと解釈した宗教で、マニ教やミトラ教さらにはキリスト教にも多大の影響を与えた、いわば知恵の原点であり宝庫である。ちなみに米国映画の「スターウォーズ」もそのテーマは善と悪の永遠の戦いであり、何やら影響を感じさせる。

このように誇り高いペルシャ人だが、イスラムによる征服以降は基本的に後発のイスラム教の影響下にあり、40年前にホメイニ革命があつてイスラム原理主義国になったことは周知の通りだ。国民性は基本的に親日である。バブルのころは大量に違法労働で入国して、上野公園は彼らでいっぱいになったこともあつた。

イスラムによる征服とセルジューク朝の成立からは時代が下るが、17世紀前半にロシア人コザックのステパン・ラージンがカスピ海を經由してペルシャに侵入して略奪を繰り返した。当時のペルシャを支配していたのは、やはりイスラム系のサファヴィー朝である。日本でも有名な歌の「ステンカ・ラージン」の歌詞によると、ラージンはペルシャの姫をさらったが部下たちの「俺たちの命で外国の女を買うのか」と言うつぶやきに押されてその姫を生きたまま川に投げ込んだという。今となつてはこの姫の名前や系図等細かいことは、知る由もない。

話を日本古代史に戻すと、やはり数年前に歴史から忘れられていた日本人遣唐使で中国皇帝に仕えた井真成(いのまさなり、せいしんせい)なる人物の死を惜しむ碑文が中国で見つかり、その真偽も含めて大きな話題となったことがあつた。日本側には裏付ける資料が存在しないが、碑文によるとその才能ある人物の若い死に当時の皇帝が嘆いたと書いてある。先のペルシャ人とは逆のケースだが、古代史の面白さはこういう意外な発見とその推測にある。

意外な発見と言えはやはり数年前の日本で、廃棄物処分場から焼却寸前の大黒屋光太夫の直筆文書が見つかったことがあつた。光太夫は紀州の漁民で、難破してロシアにたどり着き当時のエカチェリーナ女帝と面会の上に帰国した人物である。その文書は廃棄されたふすまの間に挟まっていてその端が少し覗いている状態だったが、そこにたまたま光太夫の専門家が通りかかってすんでのところで救済したのだという。

瞑想録(その17)

なんともレアな偶然でこれも歴史ファンとしては興奮に値するが、言い換えればこういうラッキーがなくて実は廃棄されている貴重文書がその何十倍もあるということだ。

本日はペルシャ人の発見から始めて、連想の行くままに色々を書き綴ってきた。これは学問的見地からは単に雑学であって価値は低いのだが、本人は書いていて面白かった。かつて私はウォーキングが趣味だった関係で、関東の色々な町や駅の特徴について多くの断片的な知識を持っている。これらも断片的である以上は価値の低い雑知識に過ぎないが、なぜか私はこれらを思い出して連想するのが楽しい。そして本日徒然なるままに書いてきて、その楽しい理由は町や駅等の特徴について自分なりに繋がりと言うかメロディを持っているというだと思えてきた。

9、学問は自然か

＜例1＞宗教学の授業でのやり取り

教授「A国のB宗教の信者は全人口の1.9%程度なのでA国のB宗教はもはやマイナーだ」

学生「最近の統計では2.4%と言う数字が出ているのでそうは言えないのではないですか」

教授「1.9%でも2.4%でも結論は変わらない」

学生「1.9%と2.4%では受ける印象が微妙に違うので、結論が同じとは言えないのではないですか」

教授「いや、結論は変わらない」

学生「それでは割合がいくつになったら結論が変わるのか、その閾値を教えてください」

教授「君は学問と言うものが分かっていない」

＜例2＞熱流動数値解析でのやり取り

発表者「解析対象の実験は実質的に2次元でやられているので、数値解析も2次元で行いました」

質問者「実験を2次元でやったといってもその薄い2次元容器を仕切る端の壁の効果はあるので、完全な2次元など不可能だ。同じ理由で私は2次元数値解析など信じない」

発表者「現象はマクロなものでかつ明らかに2次元的に起こっており、問題の本質把握の観点からは2次元解析の方がむしろ望ましいと考えます」

質問者「3次元目の乱流や境界層を無視した解析など絵空事だ」

瞑想録(その17)

発表者「問題の本質をえぐるためにあえて2次元化することは理論でも良くやられる。あなたには研究のテイストがない」

この2つの学問的やり取りは作り話でなく、いずれも別の機会ではあるが私がその場にいて聞いたものだ。このやり取りにおいて読者の皆様はどちら側の主張を支持するであろうか。実は私は例1では学生の主張を支持し例2では発表者の主張を支持したのだが、これらの例を突き合わせてみるとこの支持の仕方は矛盾があるのではないかと思えてきた。

例1では学生が「学問は素朴な感情に忠実であるべきだ」と主張しているのに対して、教授は「学問の重要なところはその本質の抽出にある」とたしなめている。他方例2では質問者が「現実に忠実でない省略物は信じない」と主張しているのに対して、発表者が「いたずらな忠実ではなく本質理解に努めなさい」とたしなめている。つまり例1の学生には例2の質問者が対応していてあえて名付ければ「自然派」、例1の教授には例2の発表者が対応していてあえて名付ければ「本質派」と言うことになる。だからもし例1で学生を支持するなら例2でも発表者を支持するべきだ。ところが私はちぐはぐに支持している。これは自己矛盾ではないだろうか。

この矛盾についてつらつら瞑想してみた。その結果私自身の本来の性格は本質主義的なのだが、他方でこと学問については自然であるべきだと思い込んでいるという、根本の矛盾で引き裂かれていることに気づいた。だからおそらく話の分野や印象の違いによって、ある時は自然派的に反応した別の時には本質派として反応しているのだろう。だとすれば私のちぐはぐはこの2つの例よりももっと根深いところにあって、かつその病は重篤だということになる。私が若い時に学者の道を選ばなかったのも、この矛盾がブレーキをかけていたのかもしれない。

ではまじめに世の中一般、例えば何かを買うとか自動車にひかれないようにするとか悪人の陰謀に引っかからないようにするとか、そういう学問のように人畜無害なことではなく自分の安全や保全に直接かかわる重要なことを自分は毎回どう対処しているかを瞑想してみた。こういう瞬発的な判断を要する事件に際していちいち引き裂かれていては、とても間に合わないはずだ。

横断歩道を青信号で渡っていたら右折車が侵入してきた、さあどうしよう。先ずその右折車を認識し、かつその車が自分に気づいているのかとか車に止まろうとする気配があるのかを、現場主義でひたすら見つめる。この態度は自然派的だ。その観察の上に立って自分は戻るべきか止まるべきか急ぐべきかあるいはこのままで良いの

かを瞬間的に判断する。この判断の根拠は観察に基づく本質理解であって、この態度は本質派的である。つまり自己安全と言った優先での高い問題では自然派一辺倒でも本質派一辺倒でもダメで、両社の正しい使い分けこそ重要だということになる。

この根本理解の上に立って先の2例を見てみよう。私は例1では学生の主張する自然な心情に共感した。だがその論じている学問対象は物理学のように数値化できるものでなく、あくまでも論述するものだ。そして論述に用いる言葉は、有限個不連続の中でしか選択の自由がない。だからこの論述分野では残念ながら、最終的には教授の勝ちで私や学生の負けである。他方で例2では素朴には単純モデル化よりも全解析の方が良いのだろうが、現状は単純モデルの方が省略していない部分の精度は高い。したがってこちらは発表者や私の勝ちである。

そしてこれらの議論から浮き出て見えてくること、それは学問とはあくまでも枝葉を振り払って本質を追求する手続きであって、例えば文学や写真のようにありのままを写すべきだという媒体ではないということだ。「まんま」は学問でないし学問は自然でない。例えば役所の手続きのような硬直した前例主義でない分だけ個々の局面では自然派的な態度もあるいは必要にはなるが、全体を通して最上位にあるのは「片手落ちであろうが本質のみを抽出する」と言う一種の知恵だということだ。そしてこの知恵を知らない人はテイストがない。

結局私のちぐはぐ理解の原因は例1において観察段階で止まっているためで、問題が論述型である以上本質の表現は有限離散個から選ぶしかないという大胆な割り切りが習慣づいていなかったためだ。もっと言えば人文科学に数理科学の常識を無意識に適用しようとしたところに、あるいはデジタル数字の常識に妄信的にこだわったところにあったということになる。

10、妻楊枝と自動車

私自身を振り返ってみると矛盾が多々あることに気づく。そもそも人は矛盾の塊なのだから自分も例外でないと言えればそれまでだが、矛盾の本質に深く迫るとしばしばそれまでに気付かなかった自分や人類が見えてきて驚くものだ。先日には学問的手続きを例に自然派と本質派の矛盾について瞑想したが、本日はもう一つ別の矛盾を取り上げる。

これは私だけなのかもしれないが、楊枝一本にも作ってくれた人の努力を謝する割に、車を買うときは単にコスパや価格で割り切った買い方をする。楊枝にも感謝があるな

瞑想録(その17)

らより複雑で手のかかる車にはもっと感謝があつて良いようにも思うのだが、車はあくまでも物であり道具であり調子さえ良ければそれでよく、寿命がきた部品は取り換えるのみである。

逆に車にドライであるなら楊枝にはもっとドライで良いはずだ。楊枝だって今時は職人が一本一本削るのではなく、機械で大量生産するに決まっているからだ。よしんば手工業の製品があるとしても、その人件費は製品の価格に織り込み済みだから経済的には何ら感謝の必要はないはずだ。それなのになぜか、楊枝には作った人を思ってしまう。

欧米人は非情に合理的で、「作ってくれた知らない人に感謝する」と言うことはない。ただ個別具体的にコスパを重視するのは徹底的で、楊枝が車よりも何桁も安いからと言って楊枝にその価格に見合う効用がなければ決して買わない。「どうせ安いからまとめて買ってしまえ」と言った大雑把な発想はないのだ。

逆に私や日本人の場合は発想や信仰が形而上でありアニミズムであるために、「楊枝にも魂がこもる」と言うような考え方が身についているのであろう。かつて高尾山に修験道の体験に行った時のことだが食堂(じきどう)で食事の前に修験のリーダーから、「1粒の米にも農民の労苦を思え」と諭された。これが日本人の一般の心であらう。

そうであるならばどうして、「車1台に多くの工員の労苦」を思わないのだろうか。これはやはり車と言うと大規模工場でロボットが部品を組み立てている姿を想像してしまいがちだからである。所詮は営利企業が収益を目的に行っている、慈善とは正反対の利己的な金収奪の媒介品に過ぎないと思うからであらう。

と言うことはアニミズムとか季節の魂とか言いながらも実はその実態は、多分に主観的かつ気まぐれで子供じみた愚かな行為なのだろうか。適当にイメージが先行しているだけで実は「イワシの頭」とたいして違わない「小信仰」みたいな思い込みなのだろうか。企業が「魂のこもった製品」と言うCMをバンバン流すと、人々も洗脳されてその気になっていくような物であらうか。人形供養と同様にどこかの神社が「車供養」を始めたら、皆も目覚めるのであらうか。

どうもそうとは思えない。かつてつくばのある研究所に行ったら最新の発振レーザー装置に神社札が貼ってあったが、それにもかかわらずそのレーザーに魂があるとは感じなかった。結局その対象に魂があると感じるか否かは、そのものがまだ自然に近

い状態にあるのかあるいは高度に人工的になってしまっているかの違いに依るのではないだろうか。

アニミズムはすべての事物に魂が宿ると信じる心であるが、ここでの「全ての事物」とはあくまでも自然の要素が濃いものを指すのであって文字通りの「全て」ではないのだ。そして手作りの年輪の入った一品物の木のテーブルみたいなものを除くと、一般的に「高いものほど加工の度合いが高くて自然からかけ離れている」傾向があるために、先にも例示した「安いものほど感謝して高いものほどドライに扱う」と言う一見の逆転現象が起きてしまうのだ。

基本的に感謝は値段に依っていない。その証拠に今あげた一品物の木目の文机、いやそれどころか人間国宝が作った金泥螺鈿蒔絵の硯箱、これなんかおよそ値段などつけられないだろうが、展覧会等でこれを見るときに我々は自然に作った人の魂を感じるのだ。作者はおそらく潔斎してから真心で制作に向かったことであろう。ところがこれがランボルギーニ・カウンタックだと、そのような気持ちは誘起されない。

たかが楊枝一本、されど楊枝一本である。別に楊枝を神棚に飾るわけではないが、何やら自分に親しいある意味自分の友人であるかの気が起きてしまう。楊枝をモチーフに絵を描くことはあっても、ジェット機をモチーフに絵を描くことはそれがスターウォーズのようなSFの特殊な場合は例外として、まずありえない。仮にあったとしてもその絵はおそらく、ことさらに無機質の恐怖を狙ったものであろう。

と言うわけで私は今日も、楊枝を感謝して使い捨てた後に、車を飛ばしてガソリンを入れて、かといって「車さんに食事をあげた」などとは毛頭思わずに帰宅するのだ。

11、慈善は善か

慈善、他人やその手の団体に愛または趣旨賛同によって金銭や物資あるいは労役をただで提供することだ。慈善は善かと聞かれれば、もちろん善であって、「当たり前のことを聞くな」とか「慈善と言う言葉に既に善と言う字が入っているだろう」などと人格を疑われる。

確かに慈善は善だ。だってタダでもらえる方はもちろんうれしいし、呉れるほうも「わづかだが良いことをした」とか「天国に宝を積んだ」などとうれしい気持ちになる。双方がうれしいいわばウィンウィンの関係にあるのだから、これがいけないはずがない。実

瞑想録(その17)

際にほとんどの宗教が献金を奨励していて、「毎週集会に来て非会員だが毎回献金を払えば全く顔を出さなくても会員」と言う宗教は多い。

「良いと思うならあなたもやりなさい」。これもよく聞くセリフだが、慈善は本来自由意思でやるものであるところこの辺から強制が入ってくる。世間体で赤い羽根等に募金する日本人もいれば、ステータス維持のために献金をする欧米人もいる。こうなってくると話は単純でなくなる。嫌々ながらの慈善、これほど人をひねくらせることも少ない。それが分かっているので私は献金など一切しない。

さらに献金する人は、それが何に使われているのかを通例知らない。多分にヤスクニ等のイデオロギー運動の日雇い賃金になっていたり、胴元にネコババされたりしているのが実態なのだが、気づいていないし気づかないほうが幸せだ。バチカン銀行がマフィアと底でつながっていてアングラマネーになっているのは有名な話だ。

もらう方の事情をある。ホームレスの中には「日々の食事にも困っているが人としてのプライドが施しなど受けたくない」という人は結構多い。とあるまじめな慈善団体は、「もらうのが呉れた人への親切だから貰いなさい」と諭すという。私などプライドのかけらもないので、もし「アーメンと言えばただ飯がもらえる」なら、100回でもアーメンと言っちゃうが。

日本ではこの夏に公開された米国インディ映画の「ポバティ・インク～あなたの寄付の不都合な真実」によると、大地震のあったハイチには今も世界から1万以上の団体が種々の慈善を目的に入り込んでいる。物資は山積みで野晒し、モノがあふれて地元民の自立をかえって妨げているという。「地獄への道は善意で敷き詰められている」、この映画を見たある評論家はこの映画をこのように総括した。

また、慈善のNPOを経営して有名になると選挙で勝ちやすくなるとか、春休み等に震災被害地で援助活動をする単位がもらえとか、援助経験者は就活で加点対象だとか、そういう話もよく聞く。これでは仮に援助された側が喜んでいたとしても、本心は自分のためにやっているのであって、決して本来の慈善ではなくむしろ偽善である。ちなみに偽善にも善と言う字が入っている。

慈善の本質とはドライに言えば、経済資源の再分配である。だから慈善をしたからと言って富が増えるわけではなく、本来行政が行うべき行為を単に代行しているに過ぎない。しかもその作業効率は、気まぐれな分だけ非常に悪い。もちろん「援助体験を通して絆を知った」と語る若者もいるが、「絆を全く知るに至れない業務」と言うのも実は少

ないのだ。結局ドライにまとめれば、「慈善とは大いなる自己満足のスキーム」と言うことになる。

自己陶醉で慈善をやる人も多いが、力みかえっている割にすぐやめたり自分のやり方でないと気が済まなかったりするから、本物と偽物はすぐに区別できる。本当の慈善はもっと淡々としていて、「気の良く回る定常業務」と言った感じになる。役人と自発者の両面が良い形で融合しているのだ。慈善で何より大切なのは継続だ。

最近読んだ本の「ホームレス歌人のいた冬」は、日本3大寄せ場の一つである横浜寿町でのルポである。ここの福祉生活館を実質的に仕切っている人々はいずれもその道何十年ものベテランの特殊職員だが、やり方はほとんど役所と同じ定常業務で、ただ個々のケースへの思いやりとそれに応じた細かい配慮に素晴らしく長けている。この手の肩の張らない奉仕に、私は本当の善なる慈善を見た。基本の「受け手本位」が自然と身についている。

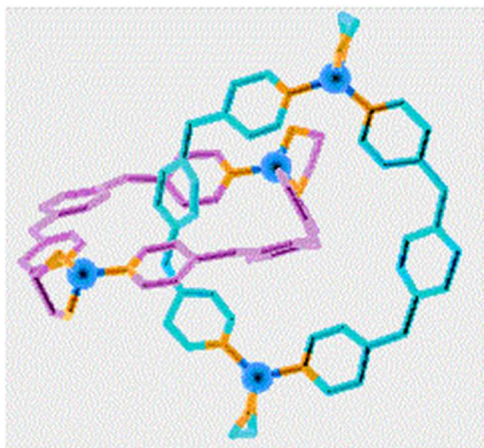
私は現在慈善行為を何もしていないしする気もない。それは私に愛がないからと言うよりは、そこまで受け手本位で長続きできるド根性を持っていないからだ。先に言及した「ポバティ・インク」や「ホームレス歌人」が教えることは、慈善も素人の中途半端な生兵法でやっては返って迷惑になるだけだということだ。

その意味でホームレスやドヤ住人を自分勝手に憐れむことは、かえってとんでもない思い上がりであり「迷惑な隣人」なのだ。もっともホームレスを最高の自由享受者あるいは自由の放浪者かと思って過剰期待で「ホームレス歌人」を読み始めた私も、種類こそ違えどやはり「迷惑な隣人」だったことになる。ホームレスやドヤ住人はみな人生に疲れていて、かといって似た身分だから互いに自分を打ち明けるといこともなく、かなり落ち込んで自暴自棄なメンタリティになっている。その複雑さを解きほぐす我慢のない人は、下手に慈善に手を出さないほうが良い。

12、干渉幾何

1月前にも「16年ノーベル賞総括」の記事にまとめましたが、今年のノーベル化学賞は「チェーン状の分子合成法の確立」と言う成果に与えられました。チェーン状の分子とは例えばカテナン(下図)のように位相が単純でない分子のことです。

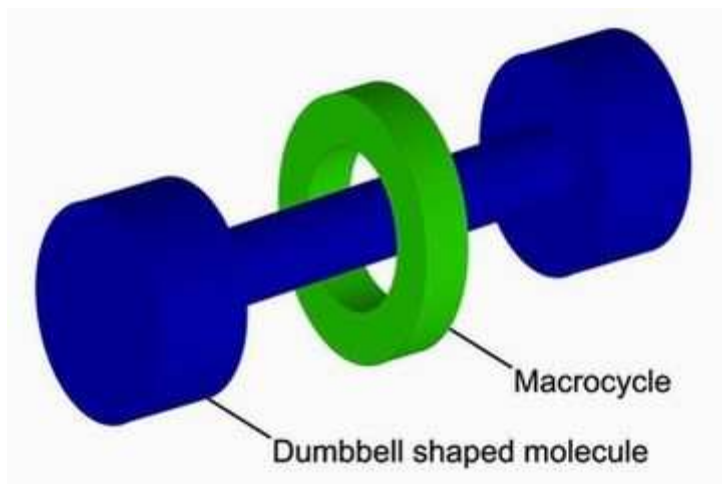
瞑想録(その17)



この形は幾何学的には2つのリングがほどけないように絡まったものです。紋章学的には「二つ輪違い」と呼ばれている形で、結び目(ノット)の中では最も単純な物の1つです。一連の合成の次の目標は、やはり単純なクローバーノット(三葉結び)形状の分子の合成でしょうか。この辺の低次元位相幾何としての結び目の話は先日、「結び目(ノット)の話」の記事にまとめたところです。

ところでなぜこのようなお遊びみたいな研究にノーベル賞が与えられるのでしょうか。世の中で第一に言われているのは、「分子スイッチ等に重要な応用先がある」と言う応用上の理由です。ですが私はむしろ、このような分子を合成する難しさを克服したところに真の授賞理由があると考えています。この手の分子を「普通に」作ると2つの輪が反応しあって、絡み合わないか1つの輪に合体するかあるいは分解してしまうでしょう。この「付かず離れず」の合成技術は、今後の有機合成技術の発展に大きな貢献をすることと思います。

さて今はカテナンを例に位相幾何との関連を見ましたが、この研究集団が作ったもう一つの「付かず離れず」の分子にロタキサンがあります。ロタキサンはカテナンと異なり、大きさを無視する位相幾何では単に「ドーナツ1個と球1個」になるだけで何も面白くありません。でも実際のロタキサンはダンベルの部分が邪魔になって外れず、決して当たり前ではありません。つまりロタキサンは位相幾何だけでは解明できない幾何的問題の存在と必要性を、応用の側から指摘しているわけです。



実際我々の周りを見回しますと、このような「干渉」が成否を分けるような問題がたくさんあります。例えばサルのツボ、これはツボの中にサルの好きな木の実とかを入れておくとサルは木の実欲しさにツボの中に手を入れて掴みますが、そうすると手が大きくなってツボから手が抜けなくなるという仕組みのトラップです。

もっと日常にはマンホールの蓋、これは丸いおかげでふちが干渉するので蓋は穴の中に落ちません。もし蓋が四角だったら対角線上に立てれば、干渉が解消して落ちてしまいます。ほうきを持ったまま家を出ようとする戸の枠につかえて出られずに、ほうきを斜めにして家を出た経験は誰にでもあるでしょう。つかえ棒もあえて干渉を利用した例です。狭いところでは傘を開けないのも、やはり干渉のせいです。人混みや邪魔板もこの例でしょう。

干渉するか否かは単に形状や繋がりだけでなく、寸法と言う数字や大きさも関係してきます。そして数字が関係する時点で、この幾何は位相幾何を超えています。記事の題で仮に「干渉幾何」と呼んだのはこのような幾何のことです。ところが純粋数学では、位相幾何を超えて数字が入ると一気に微分幾何に「ジャンプ」します。ジャンプしてしまうのはその間に落ちる幾何はいずれも群をなさないつまり演算ができないので、高度な理論を組めないからです。

でも「結び目(ノット)の話」の記事で見ましたように、結び目理論も純粋に位相幾何でありながら分類定理のような切れの良い理論は見つからずに、結局は結び目の形ごとに名前を付けるしかありませんでした。この辺は芳香族化合物が、これは特に結んでいなくてむしろ枝だらけなのですが、やはり個別に名前を付けるしかないのと状況

が似ています。結晶構造の分類も然りです。名前でしか呼べないならそれはもはや、科学と言うより芸術に近いのかもしれませんが。

結び目論で見るように位相幾何に限定しても大統一理論が出てこないのならば、ここでことさらに群論性や演算性にこだわる必要は薄れます。それよりも実用上重要な幾何的对象をそれなりの視点で見えていく方が、よほど生産的だということになります。ここでできる数学はもはや純粋数学ではなく、応用数学の一分野でしかありません。でも最近の計算機の発達も手伝って、応用数学が今極めて面白い局面を迎えています。

数学はここ30年、位相幾何、力学系、ゲージ理論、数理物理多様体(神保・三輪・柏原あるいはラングランズ予想等)と発展してきました。これ一連の流行りのけん引役は物理と言う、理論的ではあるけれども応用でした。そして次のスターは本当の応用数学から出そうな勢いを感じます。そしてその新数学の特徴は工学から芸術に至るまでのきわめて極めて幅広い、すべてを包み込むほどの包摂性にあります。おそらくこの勢いは、今まで閉鎖的かつ官僚的だった学問と言う手続きを、根本的に変えてしまうでしょう。

ここ近年の応用数学の発展の方向を見てみると、これまでの純粋数学や物理とはまるで異なっていて、これまでの数理科学がまとめてニュートンほどの古典に見えてしまうほどです。例えば可微分多様体、微分できるという条件は解析学上絶対に外せない条件でした。位相幾何と言う寸法のないところに至っても、微分できないとは「病的で除外すべき非学問的对象」であるとの常識がありました。要するに厄介なものにふたをして、その上で変に美しい世界に酔っていたわけです。

でも最近やっとこの禁忌が実は自己満足に過ぎないことに、人々は気付き始めました。その代表が最近大きく発達しつつある有限幾何や計算幾何学、例えばグラフ理論とか折紙論とかです。紙を折るということは可微分多様体と真逆に、山ほどの特異点できるだけ複雑に増やしていくという行為です。そしてこの折紙論を鏡にすると、今までの古典位相幾何がいかに狭いかが目に見えてきます。折紙の方がポジで古典幾何がネガに見えてくるのは時間の問題でしょう。折紙論は下記のサイトに図入りでまとめられています。

<http://mitani.cs.tsukuba.ac.jp/origami/>

そして今後はおそらくさらに日本の折紙以外の繊細な古典文化、綾取りとか切り紙とか文様とか家紋とかもすぐに応用数学の対象になると思います。これはやはり以前に「市松模様」や「数学から芸術へ」や「文様の幾何学性」等の記事で触れたとおりで

す。綾取りも一応は低次元位相幾何と言う純粹幾何の一分野ですが、おそらく実際には結び目のような応用数学的解明になることでしょう。これらのいずれもが冒頭の干渉幾何も含めて、広く応用数学あるいはアナログ学の一部として取り入れられて解明され、学問の水平展開と領域拡大と言う革命をもたらすものと考えています。

13、地球環境問題

私はこのブログでこれまでに、約3000の記事を書いてきた。中にはくだらないダジャレや単なる日常の記事もあるので、それなりに意味のある数だと2000記事くらいか。

私は大学や会社では一応の専門があったがそれらはあくまでも食うためであって、自分のアイデンティティーでは全くない。と言うか私はむしろ「専門性の奨励」と言う風潮に根本的な疑問を持っている。もちろん心臓手術の専門医が社会で必要とされているのは認めるが、自分は専門家になるつまり徒に自分を狭く限定するのを、非人間的であるとして拒否してきた。

そのためこの2000個の記事は、特定の分野に寄らずに広くばらばらである。もちろんそこには数理科学と芸術と宗教の話が多めだとか医学とスポーツの話が少なめだとか自分の関心や得手不得手による濃淡はあるのであるが、一応「一通り」のつもりでいる。

そんなさも「全分野に興味があります」みたいな中であって、先日は逆に自分はどんな分野に関心がないのか、最も関心のない分野を探索してみた。その結果得た答えつまり自分が否定的なほどに関心のない分野が、「地球環境問題」であることに気づいた。付帯して類似のごみのリサイクルとか公害問題にも、全く興味がない。実はISS等の宇宙開発問題も全く興味がないのだが、一番と言うことになると圧倒的に地球環境問題になる。

地球環境問題、典型的には「100年後には地球の温度が4度上昇していて海面が5m高くなる」とか「メタンガスやフロンガスの排出を可及的速やかに抑制すべきだ」と言った議論だ。5年前の東北地震前には新聞等を最もにぎわして、「若者の主張」等では「地球環境問題を語りさえすれば入賞」と言うほどの勢いだった。端的に言えば「リケジョは環境へ」みたいな感じだ。

そんな「花形」の地球環境問題になぜ壊滅的に興味がないのか。第一の理由は自分には関係がないからだ。私の家系は長生きではないので、あと20年は生きないだろ

う。その間にこの問題が顕在化するとはおよそ思えない。世間様がどんなにラッパを鳴らしても、私は自分以外のことにおよそ興味や関心がない。こうはつきり言うと「お前は人間のかたわだ」としかられそうだが、トランプ現象でも見えるように正直に言うことは良いことではないか。

個性派俳優の蛭子能収さんも、「ひとりぼっちを笑うな」と言う「反社会的な」本を恐れずに書いてベストセラーになった。彼の主張は、①良いことでも嫌なことは絶対にやるな、②良いとされていることを勧められると断りにくいそれでも断らないと結局自分が泣きを見る、③そもそもそんなきれいごとを強制される場所や仲間に足を踏み入れずにひとりぼっちの方がなんぼか楽だ、の3点である。これらを貫いたからこそ、今の彼のあのお人よ似的な雰囲気は余裕で醸し出せるのだろう。全く賛成だ。

一応言い訳をしておく、私も若いころから「他人に無関心」や「社会に無関心」だったわけではない。むしろ逆に社会貢献に燃えていた。単に40年近い社畜生活によってすり減されて、悟りを得てしまっただけである。あきらめも含めて何事も、毎日少し少し刷り込まれていくのが一番強力だ。今では蠅螂之斧と思しきものには、ほとんどの事物がそうだが、最初から徒勞しない。

興味のない第二の理由は地球環境問題が結局は雑学の組み合わせで学問の香りがなくしかも本当かどうか怪しい、多分に眉唾物だからである。先ず雑学と言うことは知識の数さえこなせばバカにでもできる、およそひらめきの要らない分野だということだ。こんなものが学問なら、ゲーム攻略のプロも学者ではないか。かつ結論について全く歯切れがよくない。「現にキリバスが沈んでいる」と言うが、短期的な気候の周期変動かもしれないではないか。

興味のない第三の理由は変に政府や国連や中央学会によって奨励されていて、さもこの分野をやるのが善人の証拠である如くに政治的に位置づけられていることである。学問的に結論が出ていないのだから、「疑わしいことは先手を打つ」という政治動機に必ずしも反対なわけではないが、こういう約束は歴史上守られたことがない。素直に聞いた人がバカを見るだけである。つまりペテン師にささやかれているほど、いかさまの匂いがするのだ。それに私は「いい子ちゃん」が大嫌いだ。一言で言って偽善だ。

まあこれらの理由が相乗して、私は地球環境問題とかごみ問題に全く興味がない。これからもこの分野に興味を沸かさない自信がある。大体あれだけ喧伝されていたものが東北地震以降はこちらの方にお株を取られてしまったのかもしれないが、すっかり

瞑想録(その17)

鳴りを潜めてしまった。仕方ない面はあるとはいえ、所詮は鳴りを潜めても誰も困らない程度の問題なのだ。また話題がなくなって退屈な時代が来たら復活するかもしれないが、所詮はその程度のヒマネタではないか。

ところで先日の「慈善は善か」と題した記事でも私は慈善についてかなり否定的で、一番の主張は「慈善は偽善と隣りあわせだ」と言うことだった。そして地球環境問題も同類のポジションだ。私は他人の偽善を糾弾するほどの公共心は社畜体験のおかげで全くすり減っているのだからこういう趣味をしたい人がするのは勝手だが、他ならぬ私が偽善のネタやカモにされたくない。ひたすらにそういうことだ。オレオレ詐欺ならぬやレやレ詐欺にひっかかって悔しい思いをするあるいは金銭的損害を被る、もっと言えば時間を取られて仕事を増やされることに身震いするほどの嫌悪感を覚える。

金銭的詐欺と言うと守銭奴のように聞こえるかもしれないが、あれだって死ぬほど嫌な会社と言う時間賃金変換器でやっと得た、血と涙の結晶なのだ。金も時間もハゲタカやハイエナには絶対に取りられないぞ。私は別に冷たいのではなく、正直なだけである。

14、盆栽と水石

盆栽、年寄趣味と言われるかもしれないが私はこれが好きだ。お盆と苔むした土の上で見事にくねった五葉の松を床の間において鑑賞すると、「これぞ日本の美」と言葉にならない感動を覚える。

ところで私はこの盆栽に関して、以前から素朴な疑問があった。盆栽が見事にくねるのは自然にそうなったのではなくて、作者が枝ぶりを計算してワイヤーで引っ張ったり接ぎ木をしたりことさらに枝を切ったりして整える。これが人工的な作為ではないのかという疑問だ。

盆栽も景色をミニチュアにして見せると言う意味では、広い意味での箱庭と言えるかもしれない。そして箱庭に、適度の人工的な組み合わせはつきものだ。あるいはもっと広く枯山水、天竜寺の枯山水などが有名だが、岩の配置も砂に波模様を描くのもすべて人手でありながら美の神髄とされている。と言うことは、人手と自然美は必ずしも排他的でないということか。

盆栽と近いやはり天然の美術に水石(すいせき)がある。盆栽も通例の飾り方は、中央に大きめの主役となる盆栽を置きその脇に1個もしくは数個の小さな植栽を置いて、

瞑想録(その17)

全体としての景色として提示するやり方である。水石はその中央の大きめの盆栽の代わりに、自然の石を置いたものと思えばよい。ここでも石の方が大きめのシテで、盆栽の方が小さめでワキである。

さてここで盆栽と水石の大きな違いだが、水石の場合は盆栽と違ってちょっとでも人手を加えると則没になる。形を整えたり削ったり等は一切許容されなくて、河原等から拾ってきた石そのものでないと全くの無価値あるいは悪意あるまがい物として忌み嫌われる。どうして盆栽は人手が許されて水石は許されないのだろうか。

世の中を見回すと、人手を加えない自然な木々がそのままに愛でられているという例もやはり多い。日本各地に自生するしだれ桜とか三保の松原とかだ。厳密には枝を支えたり間伐をしたり等はしているが、これはあくまでも手入れであって人工的な形の変形ではない。ただこれら自然のものは大きすぎて、箱庭とか盆栽にはおよそ収まらない。

だからこそ箱庭と言う世界を認めるならばそれに合ったミニチュアとして、本来の大きな木の持つ美をすべて濃縮し集約した形の盆栽を作ることは必ずしも邪道でなく、むしろ濃密な美と言うことになる。実際に盆栽を見てみると、1つの盆栽のある部分は枝ぶりが妙でまた別の部分は幹のごつごつ感がタダものでないと言うように、1個の盆栽が多くの美をまとめ備えている。

ならば水石だって適度のヤスリ掛けなどしてそれなりの曲線美を出すことがどうして許されないのか。これもおそらく大元の箱庭の世界に帰れば理解できるだろう。箱庭を作るのにはその箱庭に適度の大きさの石を見つけてくれれば良いのであって、いたずらに大きな石をがち割ったり削ったりとかすると、あたかも浮世絵にインターチェンジが描かれているようになってしまうのだ。人手は石を形作った何億年と言う悠久に比べて一瞬であり、加工は冒涇でサル知恵だ。

結局総体として人手はサル知恵であって無いに越したことはないのだが、盆栽の場合はその作用があくまでも美を濃縮させるための補助手段であるという限りにおいて許されているのだ。もし枝ぶりに本来の木の生命力を超えたカンナ削りの跡などあれば、これは直ちに水石の場合と同じく失格で退場となる。

私はこの盆栽と水石の関係がほぼそのままに、インスタレーションと路地裏写真の関係になっていると見る。路地裏写真、谷根千の裏路地とか、メキシコの貧民街の洗濯物が万国旗につるされて子供がたくさんいるところ、あるいは今は亡き香港の九龍城

瞑想録(その17)

などが代表例である。特徴はことさらに美のために作ったわけでもないのに、ありのままがそのまま絵になっているところだ。古い木造家屋の解体現場でも良い。

他方でインスタレーションの場合はことさらに集合体が美になるように、そのモチーフに合わせて作る。幾何曲線ものばかりを集めて配列してみるとか、あるいはことさらに年代物の机と椅子を無造作に置いてみたりして、美の濃縮や新しい美の創造を目指す。そしてこれらは種類こそ違っても、どちらも等しく芸術上の美なのだ。

そもそも今は科学技術の時代だから、遺伝子操作によって今までになかったランとかバラとかアサガオとか熱帯魚とかがいくらでも作り出されて、しかも外されずに品評会で入賞したりしている。それはあたかも掛け合わせ等で寒さに強くうまいコメができて安全ならば、消費者もつべこべ言わずに喜んで買っていくのとほとんど同じだ。

結局は理屈でなくて、盆栽には盆栽のそして水石には水石のその美を受け入れる世界があって、その中で輝いているということだ。だから将来に新品種の「自分で曲がる低木」や「無機合成の結果十分に成長した結晶石」ができたとして、これらが上記の従来芸術の中に入っていないとは誰も言い切れない。

ただ私は人工の極みである、クリスマスイルミネーションの俗悪さには辟易とするが。こういうのを盆栽や水石に垂らすなよ。

15、パンフ文化

私はここ数年、日帰りの範囲で主として東京と神奈川の文化施設をめぐるプチトリップを趣味としていて、週に2～3回のペースで出かけている。その際目当ての文化展示施設の見学と並んで重要なのが、駅や施設でのパンフレットやフリーペーパーの収集である。実際これらは極めてホットでリアルな地域文化情報なのだ。

私自身は長い間研究開発職だったので特許公報や学術論文に接する機会は多かったが、私の場合これらよりも町のパンフやフリーペーパーの方が単に面白いだけでなく余程に知的興奮を覚える。死んだ教科書の型通りの知識よりも、情報量が高いし新規だし意外性に満ちているのだ。

パンフの種類はいくつかあるが、一番多いのは美術館や展示場でもらう近隣や同業の展示場がやっているもしくは近日公開の展示情報だ。実際次に行く展示はほとんど、これら収集したパンフの情報に基づいている。パンフをもらった時点で一々評価して

瞑想録(その17)

いると時間がかかってしまうので、とにかくパンフを鞆に詰めておいて帰宅したのちに精査する。

次回の候補の参考になるようなパンフはそうやって集めたパンフの1割程度だ。とにかく持ち帰るので中には九州や北海道のようにおよそ日帰り圏でない展示のパンフも混じってしまう。でもそれはそれで今すぐには行かないまでもいつか似たような展示が近隣に来るかもしれないし、純粹に地域研究の教材としても役に立っている。

次に多いのが駅でもらうパンフ類だ。フリーペーパーのように綴じているものが多いが、これらもなかなか参考になる。近隣の私鉄である東急電鉄、京急電鉄、東武電鉄、西武電鉄、京王電鉄、小田急電鉄、京成電鉄、東京メトロ、都営地下鉄、横浜市交通局等、いずれも月替わりで複数の広報誌を出していて沿線の名所などを季節替わりで紹介してくれているので、地域研究材料としてはとても適切だ。

一昔前までこの手のパンフはJRが一番充実していて、しかも駅前ではJRのパンフだけでなく地域のNPOや区のパンフなども置かれていたので大変重宝していた。だが数年前に変わってしまって、今のJRの駅は金稼ぎの宣伝以外何もなく最も不毛である。おそらくJRの偉いさんが「わが社はもはや公共会社でなく営利会社だ」と言うことを外向けと言うよりも社内向けに意識改革を行っているつもりだろうが、その卑しい根性が見え透くだけに残念だ。

これらに続くのがデパートやスーパーでの広報誌、これらは食品関連の情報が多いが、それはそれで目でも楽しめるし気に入ったものは嫁様に紹介している。盛り付け例などは料理だけでなく皿や容器などにもこだわりがあり、これもなかなか貴重な情報源だ。さらに地域のミニコミ誌や周辺の区の区報もこの分野に入る。これは啓発の他に宣伝の割合が増えるものの、宣伝とバカにせずに見ると結構情報にもなっている。

ところで私の場合日帰り、しかもできる限り昼飯を大学食堂か区役所食堂に組み合わせて複数の施設をまとめて回るのが現在の定番である。これを定番にする一番の理由は気軽さだ。泊り旅行となると往復にも時間を取られるし、慣れない部屋で寝られないかもしれないし、第一気を使う。それに列車の指定席等の関係から時間が決められてしまう。

気遣いと拘束が嫌いなことでは誰よりも負けない私は、「その日にやることはその日に起きてから決める」のが理想中の理想で、そしてその結実日は日帰りプチトリップと言うわけだ。さらに回る施設の半分は入場無料か有料でも500円以下、足代も日帰り

瞑想録(その17)

だから高々2000円程度で、全部合わせても1回3000円程度だ。趣味なんて金を掛けようと思えばいくらでも上があるのだが、あえて低く工夫することもなかなかの醍醐味だ。

ちなみに今の定番になる前の趣味は、1つ前がガイドウォーク、2つ前が週末の代々木公園等でよくやる外国をテーマにしたフェスタ(例:タイフェスタ)巡りだった。フェスタ巡りの時はそのフェスタにエスニック料理の屋台が来ているので、そこで食べてはその国のチラシを山ほどもらって、やはり地域研究のネタにしていた。ガイドウォークの時もチラシに関しては同様であった。

だからチラシによる地域研究の歴史は長いのだ。そして種類も地域も様々と言うことになる。ちなみにウォークの方はそのうちに「朝早く起きて定刻までに所定の集合場所に行く」と言うのが縛りになって、今は辞めている。他方で今の場合、昼食を大学食堂か区役所食堂にするためにフェスタ巡りとは逆に平日が主となっている。

ウォークの時は集団行動なので、自由はどうしても束縛されてしまう。たまたま同じイベントに参加した人と話しをしつつ歩くということもあったが、自由参加なのでいずれも一期一会で、これを通じて長い知り合いになるという面倒さは全くなかった。好きな言葉を一つ上げなさいと問われれば、私は迷うことなく「一期一会」を挙げる。あとくされはこれも縛りだからだ。映画も最近はほとんど行かない。決まった時間に行かないといけなからだ。

チラシ情報は所詮のところ雑学で体系がないではないかと言われると、これはその通りであって決して学問だとか後世に残そうとかそういうものではない。だがこれはこれで自分個人としては一定の流れと言うか物語が背後に存在していて、したがって数で勝負するようなぶつ切りの知識ではなくアナログ的な立体的知見つまり物語なのである。そしてこの立体性を振り返りつつあちこちたどるのも、知的な楽しみの一つなのだ。

16、反知性主義

先のアメリカ大統領選挙で有利と言われたヒラリーがなぜ負けたかについてはいろいろ後追いの分析がなされているが、その中で「反知性主義」がキーワードに挙げられているという:

<http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20161111-00514581-shincho-int>

瞑想録(その17)

反知性主義はキリスト教に特有の熱病で日本では単に「バカ」の代名詞で使われるが、本来の意味は「知恵者が政治を司って愚民を導くという危険」の意味だという。そしてその起源は教祖のイエスが、知恵を気取るパリサイ人を糾弾したところにあるという。この反知性主義が本当の敗因かは別として、確かに日本のキリスト教には反知性主義でしか理解できない不思議な行動パターンがある。一言で言えば薄っぺらな「バカほど偉い」信仰だ。

もう10年以上も前のことだが、いわゆる特別養護の会員について牧師が「彼にも自立する権利がある」などと称して、教会が保証人になって家を借りてやったところ3日で燃やしてしまったということがあった。教会の家や土地を売り払って弁償できるなら良いが、さなければ教会員たちの自己負担だろう。教会を辞めた人も出たと推測する。怖くてとてもやっていられない。

あるミッション系幼稚園の運動会で「玉送り」(大球を棒で押しながら走る競争)でのこと、先生がたまたま見に来ていた園児でもない足の悪い幼児を見つけ、引っ張り出して競技に参加させた。参加と言っても教師が両側から押してただけで時間も一番かかった。だが幼稚園はその子になんと1等賞まで呉れてしまったのだ。ふつうは「偉かったね」と言う言葉かせいぜい参加賞くらいだろう。

またあるミッション系中高一貫校では、一貫校だから全生徒数は千人を超えるが「そのうちの1人がピーナツアレルギーだ」という理由で、その子が在籍する6年間ずっと給食からピーナツを外し続けたという。ふつうはその子だけピーナツなしの皿を用意すれば済むことではないか。こういう「愛の教育」はかえって逆効果だ。もしその子のアレルギーが麦や米だったらどうするつもりだったのだろう。

日本のキリスト教はどうもこの手の表面的でわざとらしい「バカ褒め」をもって、イエスの尊い教えと称する傾向が目立つ。社会派と称するプロ市民が多いのもこの油断が元だ。確かにイエスは「心の貧しいものは幸いだ」と言ったし、利口ぶるパリサイ人をさらに上回る「白トンチ」で懲らしめたりした。「お前たちの中で罪のない者だけがこの女を打つが良い」等である。だがこれらの一連のイエスの言動の特徴は油断がないことだ。

たしかに宗教は矛盾を含むものであり、この世の矛盾に何らかの解決を与えるには矛盾で対抗するしかない。だがそれは、「矛盾し逆転してさえいれば何でも宗教だ」などと言うことを決して意味しない。また仏教でも「大愚」などと自称して愚かを「誇る」とはあるが、これは心から人の知恵の愚かさに感得したうえでの行いである。

もちろんキリスト教の本場の欧米にも、この手の反知性主義は全くないわけではない。子供は小さい時から勉強に優先してチャリティを習得させられる。教会でも「万人祭司」と言ってことさらに手間がかかっても平信徒に物事を決めさせるような、民主主義のプロトタイプみたいな習慣がある。

だが本当に反知性主義が欧米を支配しているのなら、どうしてノーベル賞の半分以上を彼らが持っていき、工業や技術開発を主導して先進国になり、オリンピックでもメダルをたくさん持っていくのだろう。どうしてベストアンドブライテストなどという言葉があるのだろう。

先に挙げた中高一貫校の現在の所在は小山の上である。そこは頂上に戦国時代の山城があった。ところがこのミッション校が引っ越してきたときに城跡を全部擦りつぶしてしまったので、今は跡形すらなくかわらのかけら1つ出てこない。日本のキリスト教の特徴である油断と傲慢、これが「日本文化を踏みにじる態度こそ本物のキリスト者だ」として薄っぺらに現れたのであろう。

先も述べたようにイエスの真の愛は単純な上下反転ではなく、だれよりも本質をついていて知恵に満ちていた。イエスは正しくは知恵を愚かにしたのではなく、知恵ぶる者を否定したのである。この真摯な態度を形式的な単なるお行儀にしまった初めの人物は、「処女降誕と復活さえ信じればそれで宗教だ」などとした使徒パウロである。そして時代が下るにしたがって聖書信仰が当たり前になり、この形式主義だけが上辺にまねされたのが日本のキリスト教である。本来のイエスの精神とは真逆だ。

だから使徒パウロより前の本来のイエスに原点回帰するならば、イエスが最も嫌ったのは安息日とかパリサイ人と言った利口ぶる形式主義であって、彼自身はトンチの塊であって決して反知性ではないことが分かる。イエス自身は宗教の形を整えなかった。それが利口ぶる形式主義の原点だと知っていたからだ。そしてこのイエスの初心に反して彼の教えをキリスト教と言う宗教に固めてしまったのが使徒パウロで、この時点で反知性主義が入り込んだ。現代のキリスト教はイエスを勘違いしているとは思えない。

冒頭で紹介した「反知性主義」、これを本にしたのが国際基督教大学(ICU)の副学長の先生だというのも大変興味深い。大本山が積極的にパウロ教の先頭に立っているのだ。文化功労者で著名な文化人類学者でもあった故山口昌男先生は若い時にICUで助手をしていたが、「キリスト教に改宗すれば助教授」と言う内示を「逆差別」と蹴

瞑想録(その17)

って東京外国語大学に移った。彼らはこういうことを平気でやる大学であり宗教なのだ。

反知性主義をイエスにまで遡って「利口ぶる小物を退治する」と言う正しい意味だったら、「利口ぶる小物」とはまさにヒラリーのことであり、このICUの副学長様の言うことは当たっていることになる。だがこの先生は反知性主義を「知力が権力と癒着して間違いを犯すこと」と説明しており、と言うことはヒラリーが知性であると暗に認めていてかつヒラリーの敗因を「頭が良いのが災いした」と残念がっている点で、まるで現実と正反対の主張をしている。間違った結果たまたま合ってしまっただけだ。

17、絵画に見るモチーフ

これまでに何回か文様あるいは家紋と言う、完全にではないものの繰り返しを基本とした図案について、応用数理に近い観点から何回か見てきた。だが現実には、ほとんどの芸術に繰り返しはない。

繰り返しのない芸術の私なりの理解としては以前に俳句の分野で、「俳人金子兜太」なる題の記事を書いてみたが、そこには数理との共通面は見いだせなかった。今回はとある公募絵画展(14年ハマ展)からいくつかランダムに選んだ絵について、自分なりにそれらのモチーフを読んでみる。なお私は絵の技法や巧拙について全くの不案内である。また公募展を用いたのは人数分だけ違う世界を見ることができるからである。なお元の絵は30~50号であるが、この記事では大きく縮めてある。

瞑想録(その17)



1-1、「絢」。形がなく色だけあるいは微細な筋の抽象画である。色は基本的に橙系で、色や筋の密度分布は一定である。この絵のモチーフはおそらくテクスチャーであって見たままに感じるのが正解だが、こういうタイルや絨毯もあってよい。

1-2、「連鎖の情景」。黒の濃淡のみでおそらく机と植物をデフォルメしたものを描いている。単色画は無機的な雰囲気を出し、植物はまるで湯気のように立ち登っている。心の揺らぎを絵画化したものか。

1-3、「静物」。暗闇の中に動かぬ静物が浮き出ている。ろうそくの炎だけは揺らぐのだろう。暗闇に光る机や小物はまるでこの世の救いのような。描きたかったのは一条の光か。

瞑想録(その17)

1-4、「蓮荷図」。極めて具象である。蓮葉とその水面での鏡像がリアルに描かれていてこれは鏡像繰り返しである。ほぼ緑の単色画だ。絵の大半が鏡像の側であり、心の影性を現していそう。



2-1、「歴日」。一見の素朴であるが、こういう技法か。何気に聖画を連想させる。題名にはあえて「暦」ではなく「歴」を使っている。おそらく追憶の一コマで、すでに亡くなった人も含めたなつかしさの表現ではないか。

2-2、「友」。ほぼ青の単色画である。二羽の鷹がむつみ合っているが、題からしてつがいではないであろう。色が友情と反対に寒々しい。友情のはかなさを描いているのだろうか。

瞑想録(その17)

2-3、「'13象—しょう—」。黒単色の抽象画であるが、ほぼ薄灰と真っ黒の2段階しかなく、かつ形象は幾何的である。その中で丸い線が印象に残る。本当の柔らかさを表現しているように見える。

2-4、「人と船」。分かりやすい油絵で、題が不要なほどである。現場を見ての写生であろう。普段そのものの景色がかえって印象に残って、そのままを描いたのであろう。



3-1、「朝霧」。霧と言うよりは北海道の樹氷を思わせる寒そうな絵である。その樹氷を両側に描き中央はことさらに青い山肌とした構図である。きっと景色の美しさに見入ったのであろう。

瞑想録(その17)

3-2、「花かご」。画面一面に咲く花はユリとアジサイであろうか。日本画ならではの細かいタッチでかごに生けられた花を描いている。おそらくこれが作者の理想郷であろう。

3-3、「諸鈍(しゅどうん)」。題名は奄美の民謡。奄美は行政こそ鹿児島県だが文化的には沖縄。女性の衣裳も紅型(びんがた)系の色模様である。沖縄に旅行した時の思い出の凝縮か。

3-4、「旭光に聳える」。雪山を真横から見ている。見上げたものを横からに再構成した絵か。下から土、雪、青空と色のコントラストを控えめに強調している。作者は登頂したかったのだろう。

心頭滅却して絵画を眺めると、絵画を通して作者の心象が波動として伝わってきます。その波を受信して同じ心象を自己内に形成しています。あたかも作者とは昔からの友人であったかのような錯覚を覚えます。

18、夢と解釈(その8)

<夢1>私は猫を飼っている。私に良くなついていて、抱き上げても怒らない。私はその時の猫のぬくもりに幸せを感じている。なぜか夢に家族は出てこない。ところがその猫ちゃんが近所の悪ガキに石鹸を飲まされる。私は猛然と抗議に行く。

<解釈1>私は正直に言って、犬や猫が好きではないです。そもそも私は犬猫のほこりで花粉症になって、くしゃみが止まらなくなるのです。私にペットセラピーは無理ですが、世の中では流行っていますね。「将来年を取って痴ほう症になったらやられるのではないか」と言う恐れでしょうか。

<夢2>林家木久翁の独演会に行った。あの噺家は痴呆気味の頓珍漢が売りなのに、その日の話は蘊蓄とか説教とか火の用心とか車に注意とか、まじめすぎてつまらないことこの上なかった。着ている羽織も黄色でなくまるでぼろだった。私を含めて何人かが我慢しきれずに中座して、主催者に文句を言って入場料を返金させた。

<解釈2>タイミングからして「札びら無罪買い」の高畑親子に対する怒りが、なぜか木久翁さんに置き換えられて表面化したものだと思います。

<夢3>私は夢の中で小学生である。クラスに友人のない孤独な子がいた。それが自分なのかあるいは別の子なのか分からない。ただキリスト教徒であるという設定だ。みんなで「カトリッコ、カトリッコ、ヤーイヤイ、ドンブラコのドッチラコ」と何度もからかっている。踏切にきてクラクションを2回鳴らした。突然オリンピックのファンファーレが鳴り響いた。

瞑想録(その17)

＜解釈3＞私のキリスト教が嫌い、キリスト教特有のわざとらしい愛への嫌悪が出たものだと思います。

＜夢4＞設定された時代は戦後まもなくで、我々は会社の命令で米軍キャンプに出稼ぎに通っていた。仕事は基本的に雑役夫だ。物を運んだり掃除をしたり穴を掘ったりしていた。ところがある日同じように出勤してみるとなぜか出勤表に私の名前がなく、スパイ容疑をかけられて拘束されてしまった。

＜解釈4＞「他人の手落ちで不条理にもひどい目に合う」という悪い偶然を、常に恐れていることの表れだと思います。

＜夢5＞横須賀湾のすぐ沖に桜島のような無人島がある。我々レンジャー部隊は迷彩車でそこに移動し、その隠れた場所の中で綱渡りとか滑車による坂下り等の特殊訓練を受けていた。どうも対テロ作戦の一環のようだった。

＜解釈5＞「隠れた場所で何か異色のことをする」ことに、快感があることの表れだと思います。

＜夢6＞昔のクラス仲間で「ドブス」と呼ばれていた女の子と結婚して、子供もできて仲良くやっていた。ところがある日久しぶりに昔の仲間が集まることになり、私は嫁様のことをどう言い訳したら良いものかあれこれ悩んでいた。そうしたら次の日もその続きの夢を見て、やっぱり悩み続けていた。

＜解釈6＞私はそんな世間体を気にする人間ではないですし、今の嫁様もブスではないです。ただその夢の中の妻子、現実とは違う人なのになぜか違和感がありました。

＜夢7＞最近特に暗くなってから、特定の人に見張られているような追跡されているような気がしていた。そんなある日その追跡者は私の前に姿を現した。ずいぶん昔の知り合いだという。そして私の現住所を探すために苦労したとも。男か女かもわからないし、その人に見覚えはない。だがその人は私に執着があるという。「今までのあなたはすべて動画に撮ってあります、付き合わないならばユーチューブで公開しますよ」、その人は無表情なイントネーションでそう言った。

＜解釈7＞私個人は、また会いたいとか懐かしいといった類の古い知り合いは一人もいません。仮に昔の知り合いが突然現れて思い出話などされたら、現実の自分も迷惑がるでしょう。

＜夢8＞私の課に若い人が転勤してきた。皆にあいさつさせようとする、「今回の転勤は全く不本意だ」と泣き出してやまない。仕方ないので元の職場に連れて帰ったと

瞑想録(その17)

ころ、その元上司にも「こんなところはもう嫌だ」と泣き止まない。元上司の方は慣れっこのようだった。そうしているとその若いのが、「その荷物をトラックに積むな」などと勝手に指示を出し始めた。元上司は私に「この調子だから給料も上がらない、そしてふてくされるという悪循環なのですよ」とささやいた。

<解釈8> その夜は鼻が詰まって自分のいびきで目が覚めるほどだったので、そのうるさい音が若い人の鳴き声と言う解釈になってこの夢に至ったのだと思います。

これまで8回にわたって約70個の夢とその自分なりの解釈をしてきましたが、少なくとも私の場合前の日とか少し前に身の回りに起こった、言葉にするとかことさらに記憶するほどでもないちょっとしたエピソードが、寝ている間にいくつかつなぎ合わされて夢と言う心象となって浮かんでくるようです。夢判断で良く言われるような、「家が燃えるのは財産が入ってくる象徴だ」とか「車は子宮を通して女性や母の象徴だ」といったきわめて象徴的な夢はありませんでした。

そもそも私が夢の書き留め始めたのは、夢と言う典型的な心象を通して脳の働きや演算、もっと広くはアナログに特有の作用素を探るためでしたが、これについてはまだ際立った結果は出ていません。引き続き瞑想していこうと思います。

19、アナログ論理

最近これまでに何回か特に模様や数列を通して、数学と芸術の関連及びこれらの境界線の在り方を見てきた。一言で言うと厳密に繰り返し構造があれば数学的であり、少しでも乱れや混入があればもはや数学的でない。だから完ぺきな市松模様や結晶は数学的だが、これに商標が1つ入るとかあるいは数字が1つ違っていると、もはや数学的でない。

言葉はどうしても広がりを持つのでアナログになってしまうが、仮に言葉を厳密に定義してデジタルもしくはデジタル待遇にしたとする。するとこの上に乗る論理はデジタル論理であって、真偽一意に決定できるはずである。例えば「市松模様は2色が交互である」、この叙述は論理的でありかつ正しい。「六角格子は最密充填である」、この叙述も論理であり正しい。

だが「LV(ルイビトン)のバッグは薄茶色と濃い茶色の市松だ」と言った時、市松自体はそうかもしれないがバッグの中央に「LV」というロゴが入る。そしてこの分だけデザインは市松から外れるから、この論理はデジタル論理(確定論理)とは言えない。市松と言う言葉を広く取って「ほぼチェッカー」とすると今の主張は正しいかもしれないが、

瞑想録(その17)

この時点で市松と言う言葉がアナログになってしまい、この論理は「蓋然的に正しい」という意味のアナログ論理になってしまう。

最近見てきたように「アナログ数字」と言うものは全順序でもなければ等間隔でもなく、また必要に応じて生成消滅もできる。以上の議論はこれを例示したものである。これを「いい加減で非厳密」と取るのが従来の数学や学問的手続きだが、見方を変えて「融通が利き発展性がありかつ現実的である」と見れば返って広い世界と可能性が展開されるのだ。

世の中は多分に連続かつ複雑に入り込んでできているが、この様相を「病的である」のレッテルで除外するのではなく逆に「使える」とするならば議論の適用範囲は格段に広がる。但し従来の数理科学や学問のような大統一理論に支配されるとかきれいな式で書けるということではなくて、多分に個別具体的でありその個別具体性に沿った勘やコツがその知恵の働きどころとなる。したがってアナログな知恵の習得は系統的にはできずに、おのずと場数とひらめきとケーススタディと言う泥臭いものになる。

但しアナログ世界あるいは現実世界には系統性がないからと言って直ちに全くバラバラな個別の知識の総体であって一つ一つ個別に覚え気付くしか方法がないのかと言うとそういうこともない。人にはモチーフと言う本質に気づく能力があり、また類似な面をまとめることにより応用転用するという能力もある。さらに具体的には個人的な経緯が入るが、それら一連の知識を統括するメロディと言うか物語世界が存在している。

ここで今「個人性」を挙げた。と言うことは論理を理解すること、それ以前に論理列を飛躍なく組めてそれに飛躍がないと認めかつその真偽の程度が言えるという行為は、論理と言う言葉の冷徹な響きに反して個人的経験が実は深くかかわっているということだ。そしてこの事実、アナログはもちろんデジタルな絶対論理もこの個人性の例外としないということだ。

デジタル論理の中でも無条件に成立する、言い換えれば役に立たない論理として三段論法、演繹証明、対偶があるが、実はこの堅物すら個人体験から全くの自由ではない。例えば「サンマは魚である＋魚は動物である＝魚は動物である」、これは完ぺきな三段論法である。だがこれを聞いた人がもしサンマや魚を知らなければ、この主張列が論理だとも思えなければ真偽も判定できないのだ。

もっと日常的に「どうしてせんべいを食べないのだ」「だってお腹がいっぱいだから」、この例を考えてみよう。これは質問に対して理由で答えているから論理だが、聞いた

相手のお腹いっぱい加減など他人が知りようもないから、この論理を是として「そうかい分かったよ」と返すのか「嘘だろう食べなさい」と返すのかは場合次第なのだ。つまりデジタル論理であっても通常の真偽判定には個人差がある。

そしてこの返し方があまりにも頻度多くずれている人は、常識がないあるいは頓珍漢だから相手にするなと言うことになる。この局面からも分かるように論理学と言う数学の近くにあってもよそあいまいや間違いと縁遠い手続きであっても、実は経験と実践の偉大なる集合体なのだ。と言うことは経験すら跳ね返す数学とは、実は極めて非現実な虚業だということになる。

だが単に論理学や数学を否定するだけなら、あるいは誰にでもできるだろう。私がこの一文で言いたいのは、個人的経験とか相対的な評価をあえて許す数理科学や論理学の建設の提案であって、それは何度も繰り返すが個人的な評価尺度と言う相対性や出たとこ勝負の揺らぎを許すという常識変更をしないとできないということだ。

冒頭の市松の例で言うならば、少し前の「市松模様」の記事で記述したようなだんだん薄くなるバリエーション、さらには「絵画のモチーフ例」の記事で記述したような全く繰り返しのない景色等多くある。こういったものを徒に長い平文の説明文ではなく、アナログの言葉でより効率的に伝え得る仕組みの構築を促していることになる。

最後に注意しておく、ウィキペディアでも身近な辞書でも「論理学」と言う項目はあっても「論理」と言う項目はない。つまり「論理」はある意味無定義用語になっているので、議論に当たっては賢明に無用な混乱を避ける努力が必要だろう。

20、蛭子能収と震災文化

初めに断っておくが、本日の一文は漫画家兼タレントの蛭子能収(えびすよしかず)が東北地震の被災者の為にチャリティを開いたとかそういう話ではない。彼はそういうことをする種類の人物ではない。

最近蛭子能収の「ひとりぼっちを笑うな」という本を読んだ。内容からはむしろ「友達が無いのを叱るな」と題するべきかもしれない。誰でも学校の先生とか先輩とかに、「良い友達を作れ」あるいは「友人がいない奴は人間失格だ」何度か指導されたことがあると思う。だがこう言いたいわば「当然の常識化した人の道」に彼は敢然と反旗を翻して、「友人だって疲れるからひたすら一人でいたい、その何が悪い」と反論しているのだ。

あのさも人の好いイメージからは想像もつかないが彼は人の群れ嫌いで、有名番組「バス旅行の旅」の打ち上げ会でもさっさと帰って一人で居るという。私も全く同じ種類の人間なので、あのような有名人が私の気持ちを代弁してくれたことに大いなる喜びと安らぎを得ている。言い換えれば彼の本からは何一つ新たに学んではいないのだが、痛快だったし多くの人々もこのようなポジションの存在をポジティブに学んでくれたのではないかな。

人が無意味に半強制すること、その多くはきれいごとでかつその気のない人にはうるさくて迷惑千万なのだ。気の弱い人は「自分が間違っているのか」などと本気で悩んでしまうことだろう。だが現実には十人十色であり、自分に自然で自由であることが何よりの喜びなのだ。蛭子が言うとおり、善意特に一見善意に見えることほど危険な物はない。

ところで最近とある美術館で、東北地震とその復興をテーマにした企画展を見た。正直に言うと私は、今の蛭子さんのように震災復興やそれに関連したチャリティ行為に全く興味がない。以前から気になっていた美術館に行ったら、たまたまその時の企画展がそれだったというだけなのだ。だがせっかく行っただけで、一通り見てきた。

たしかに5年前の東北地震では何千人もの人が命を失い、今でも避難している人が何万人もいる。その意味で現在進行形だから今でもこういう企画がなされるのであろう。あの天災は地震学や都市計画と言った工学的視点だけでなく、情報共有とか避難民の心理とか人文科学の面からも研究され明らかにされ改善されるべき問題は山とある。だが芸術はどうだろう。

ここ5年の間に多くの芸術家が、震災をテーマにした作品を発表してきた。それは同情に促されての作品も多いが、他方で希な事象であることに着目し便乗した作品も多い。芸術は特に他人と違ったものや新規性の高いものあるいは意外なものほど褒められる世界であるから、その意味では現象自体が非日常である震災は格好のテーマになり得る。誤解を恐れずに言えば「我々は千年に1度と言うレアな機会に恵まれたラッキーな世代」なのだ。

その非日常に沿って作りさえすれば自動的に新規である。それに同情を少し振りかければ免罪符にでもなるかのような安っぽくて稚拙な作品の数々、特に「避難民が避難所で作った」というだけの口上の「手作り」の作品のオンパレード、悪いが私にはち

瞑想録(その17)

よっと見え透いていて受け入れにくかった。おそらく収益の一部は被災地に寄付すると言った美談も込みであろうが。

美術史論を読んでも、あたかも震災を一つの文化と位置付けたいというような芸術哲学の論考がしばしば見られる。だが果たして震災とその付帯事象は文化となれるのか、あるいはなって良いのだろうか。なった時点で被災者から遊離して独り歩きをしてしまうのではないか。もちろん東北文化はあってそのエピソードの一つとしては、一種の特異時点として震災がありうるだろう。だが「震災は文化だ」と声高に叫ばれると、先の蛭子の「友人を作れ」と同じような脅迫に聞こえる。もっと自然に接することはできないのか。

その「震災文化」の大きな一つの分野に、「原発事故」がある。いわゆる「フクイチ」だ。いまだに福一原発をイメージしたような告発のあるいは反原発的芸術観の情緒的な作品を結構見る。だがこれって「原発の電気は安価だ」などと言う虚構まで作って国策で強引に導入した原発を、かえって裏から宣伝しているように見える。原発は忘れられるのがベストであり、そのためにはひたすら無視するのが最良の取り扱いなのだ。「原発文化」などあってはならない。

展示品の中に1つ、岡本太郎が広島原爆をイメージして作ったという作品があった。下図がその長い作品の一部である。この作品の制作意図として岡本は、「原爆を悲劇や被害者の観点で描くことに違和感を持つ、自分は竜に立ち向かう勇者たちの構想で描いた」と言っている。この断りを見て私は岡本の偉大さに感服した。



そうなのだ。かわいそうのワンパターンや被害者で弱者と言う視点の押し付け、こう言う言い訳は「絶対に絡まれない」という意味では安全かもしれないが、善意を隠れ蓑にしている安直でかつ薄っぺらすぎる。ましてやそれらを総まとめして「震災文化」とは、いわゆる被災者に失礼だ。善意の隣に偽善があり、小さな親切の隣に大きな迷

瞑想録(その17)

惑がある。嫌われるのを承知であえて言うが、震災文化と言う芸術論はその主人公を被災者でなく制作者である自分たちに置いた時点で、すでに破たんしている。

21、大和魂

本日はクリスマスなので、讃美歌やキャロルではなく、私がしびれる武士道と大和魂の話を書きます。最初に2曲紹介、長いので部分的な紹介です(MSワードのエラー回避のために一部カタカナ)。

昭和維新の歌(青年日本の歌)

3、ああ人栄え国亡ぶ 盲(めしい)たる民世に踊る

治乱興亡夢に似て 世は一局の碁なりけり

4、昭和維新の春の空 正義に結ぶ丈夫(ますらお)が

胸裡(きょうり)百万兵足りて 散るや万朶(ばんだ)の櫻花

10、辞めよ離騒(りそう)の一悲曲 悲歌慷慨(こうがい)の日は去り又

われらが剣(つるぎ)今こそは 廓清(かくせい)の血に踊るかな

<https://www.youtube.com/watch?v=e89NqIgQ3DE>

馬賊の歌

1、俺も行くから君も行け 狭い日本ニヤ住み飽いた

海のかなたニヤ支那がある 支那ニヤ四億の民が待つ

4、昨日は東今日ハ西 流れ流れし浮草の

果てしなき野に唯独り 月を仰いだ草枕

7、御国を出てから十余年 今じゃ満州の大馬賊

亜細亜高嶺の間から 繰り出す手下五千人

<https://www.youtube.com/watch?v=PjwXWW4rk20>

いずれも戦前の昭和初期に大いに流行りました。若者に夢と勇気を与えたものです。特に昭和維新の歌など、二二六事件の精神的支柱になりました。日本の美、命を惜しまず大義に準じる心意気が、にくい程に歌われています。

二二六事件は立ち上がった青年将校たちは結局、天皇陛下のご聖断により志に反して反乱軍とみなされ、投降ののちに処刑されました。赤穂浪士と異なって、いまだに忠臣とはされていません。当時陛下は国粹主義の暴走に心を痛めておられ、その意味ではこういう処断も避けられなかったのですが、彼らの世を憂う心は純粋に忠義と義憤でありました。

瞑想録(その17)

時代的背景としては世界恐慌の波及による農村の疲弊等の惨状があり、先の日清日露の2大戦では多くの犠牲の上に勝利したものの、その勝利で得たものは世界情勢もあって国民の満足するところではありませんでした。二二六事件があろうとなかろうと、また首謀者たちの処断がどうであっただろうと、大東亜戦争は食い止められない勢いと運命にあったと推察します。ですがこと精神の高揚に関しては、日本ほど優れた美的感覚と芸術性を有する国はほかにないことでしょう。

先の大戦は志空しく敗れ去りました。終戦の詔勅にも「堪エ難キヲ堪エ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス」(注:エはへ)とあるように、真の太平を開こうとする志は理解されるに至りませんでした。もちろん精神においては勝っていましたが、戦争とははるかに物理的な事象です。生産技術とシステムに強い側に利があるのは、考えれば当然です。



上の図は空母蒼龍の船影です。性能の良さがその均整の取れたフォルムにも満ち溢れています。ではこのように工業的にも先進国であった日本が、なぜ戦いではこのモノづくりの合理精神が生かされずにただただ精神力だけで打ち勝とうとしたのでしょうか。

私が思うにそれは、大和魂と言う潔い精神性が圧倒していて、合理性の入る余地がない程だったからだと思います。逆説的な言い方ですが、日本は優れすぎていて、下々の実戦では勝てなかったのです。ですから今からでも合理性を含有することさえ忘れなければ、この大和魂は再度日の目を見ても良いのではないのでしょうか。

一連の大和魂で非常に大切なことは、それが北の「將軍様をたたえる歌」のような強制でも刷り込みでもなく、きわめて自然に若者たちに膾炙していったことです。明治維新で四民平等となり、それまで人口の1割に過ぎなかった武士階級が、いわば全員武士階級になりました。維新の歌を作った三上卓も当時皇道派と言われた軍首脳た

瞑想録(その17)

ちも、多くは農民の息子でした。望んでなった一億の武士(もののふ)が、こぞってこういう高い精神状態に至っていたわけです。

ただ残念なことに、世界政治は正義や理想だけでは進みません。予算の制約もあれば外国との妥協もあるわけです。その現実を見えなくするほどにこれら一連の歌には「魔力」がありました。五一五事件では「何でも話せば分かり合える」と信じていた犬養毅が、二二六事件では国際経験豊かで経済政策のプロであった高橋是清が暗殺されていることは象徴的です。

繰り返しますが、現実の政治は決してきれいごとではありません。その「下世話」の不潔さを極度に嫌う武士道、これが逆に虚を突かれたのが昭和20年の敗戦までの日本の構造の総括と言って良いでしょう。これらの精神によって立った青年将校たちは、結果として世慣れた上層部に利用されたという評価もあります。それは現在でもそうでしょう。ですからこれからの我々は利用されずにかつ潔く生きていく、ある意味のしたたかさが必要です。イエスさんも十字架に付くまではしたたかでした。

22、承認行為

例として次の会話を見てみよう:

親: どうしてハムを食べないの?

子: だって食べたくないのだから。

親: じゃあいいわ。

この会話で親は子に理由を聞いている。だから子は本来のところ、論理的に理由を答えないと答えになっていない。それにもかかわらず親は子の非論理的な回答に納得している。こういう光景は日々の日常会話で極めてよく見られるやり取りであって、むしろ論理的なやり取りの方が少ない程である。

ではなぜ親は子の非論理的な回答に納得できるのか。それは理屈抜きに親自身もその長い人生の中で幾度となく子と同様の体験を持っていて、それに正の方向で合致したからである。このように連綿たる会話のその基礎となる各段階での承認行為の根拠は、圧倒的に体験に基づいている。

客: ハンバーガーセットを1つください。

店: はい、3000円になります。

瞑想録(その17)

客：嘘でしょう、高すぎる。

店：どうして嘘と言えるのでしょうか。

客：千円以上のバーガーセットなんて見たことないよ。

この例でも会話の各段階で直前の相手の発言の意味は、各々理解している。そして理解したうえで反論している。単に賛成できないのだ。そしてその根拠はまたしても、理屈ではなく客のそれまでの経験だ。もし理屈で答えるならば原価とか人件費の見積もりをして提示することになるが、現状に比べて明らかに面倒になる。

だが理屈でなく多分に個人差が入る経験が、およそ根拠になりうるのだろうか。それは経験と言うものがもちろん個人差の揺らぎはあるものの、人の本能の共通性や経験の往々の類似性によって、多くの場合判断に疑問を挟む余地がない程類似化するという性質があるからだ。この蓋然傾向がなかったら、人の世界の秩序はおよそ成り立たないだろう。実際理屈のない場合も多いからだ。

もちろん個人差はある。例えば今の会話でバーガーセットが800円だったら、人によって承認して買う人と承認せずに買わない人に分かれるだろう。あるいは意味が分かったうえで悩む人も多いかもしれない。どちらにしても自分の体験から出た相場観と言う物差しがあって、それを基準に判断している。根拠となる実験結果や引用文献など一々ない。

他方で論理だから絶対と言うこともない。

面接官：申し訳ありませんが採用できません。

面接者：なぜですか、理由を教えてください。

面接官：タイプのスピードが不十分だからです。

面接者：1分に120タイプは平均以上でしょう。

面接官：いずれにしてもそれが理由です。

今の会話はずっと論理のやり取りなのだが、それでも理屈は形式的に通っているだけで微妙なところである。本音はむしろ別のところにあるのだろう。理屈は形式的には本音とは別の建前として、いくらでももっともらしく作れるところがある。本音は多分的にアナログ的な感情であるところ、それをいかにもデジタル的な厳密さを装わせるためである。

さらに役に立つ理屈である非自明の論理をもっと見てみよう。非自明と言うことは内容にまで立ち入らないと正否が言えないということである。

瞑想録(その17)

- ・彼が歌っているということは彼が生きているということだ。
- ・彼が歌っているということは彼の機嫌が良いということだ。
- ・彼が歌っているということは彼が今山の向こうにいるということだ。

この3つの論理はすべて形式的には同じで、三段論法でも演繹論理でも対偶でもないので、形式だけから論理の正誤は言えない。そして意味にまで立ち入ると、1番目は含意になっていて絶対に正、2番目は含意ではないが経験的蓋然的に正、3番目はおよそあり得ない状況なので誤と大抵の人は結論する。それも「歌うのは気持ちが良い場合が多い」あるいは「歌い声が山の向こうまで聞こえるはずがない」と言う経験に基づく相場観があって初めて判断できる。つまり非自明な論理の正誤も多分に、論理や理屈でなく経験で判断されるということだ。

もっとも逆に、感情に関する事項が論理レベルで返せてしまうこともあります。次の例で昭雄さんは犬猫に全く興味がありません。

和代: 飼い猫が死んでしまい、胸が張り裂けそうです。

昭雄: ご愁傷さまです。

この例における論理レベルとは「推論に飛躍がない」「筋が通っている」という意味の論理ではなく、「感情にまで深く行く以前の表面的な形式レベル」という意味です。かつての大元は感情や経験であっても、あまりに場数を踏んで相場観が固まってしまうとあたかも論理のようになって、表面的かつ機械的に省エネで返すことになります。昭雄君に感情移入は全くありません。

本日はよく「論理的な態度が大切」と言われながら、現実はそれほど単純でないことを見てみました。

23、推論プロセス

人は相手の発言や環境の変化を直ちに読み取れないときは、頭の中で色々と仮説を立てては捨てる、「推論」と言うプロセスに入る。

＜例1＞電話でPCオペレーターとの会話の時に、「そのクレカのパスワード(PW)を入力してください」と促された。だがクレカに16桁の番号はあるがPWを設定した覚えはない。相手は信頼ある会社だしそもそもこちらからかけた電話だから、オレオレ詐欺と言うことも考えられない。裏面の印刷した数字列かとも思ったがなんとなく違うよ

瞑想録(その17)

うだ。頭の中でしばし試行錯誤をし、その錯誤の輪をだんだん広げていった結果、しばらく経って「そのクレカの使用履歴を見るホームページに入れるPWのことだ」と、やっと分かった。この間頭の中はフル回転していた。仮説と棄却の繰り返しだったように思う。

＜例2＞(薬剤師)「この睡眠薬には夜中に体を冷やしてしまうとか寝ぼけて起きて転倒すると言った副作用が報告されています」。(私)「それって単にその薬が良く効くと言う意味でしょう」。専門家は論文通りに言うが要領がない。それをまとめて言い換えるのも一種の脳内作用であり、推論だ。

＜例3＞(ボケ、運転中)「いけない、今牛乳瓶を轢いちゃったよ」。(ツツコミ)「おい、見えなかったのかよ」。(ボケ)「ああ、道路を横断していた爺さんのポケットに入っていたからね」。これをすぐに笑えなかったら推論力が弱いです。要するにこのボケは爺さんを轢いちゃったということ。

＜例4＞(小学校教師、修学旅行中に)「食べ終わったお皿はありがとうと言って食堂のお姉さんに返しましょうね」。(生徒だった私)「通常の商行為にどうしてお礼が要るのですか」。推論は正しいと思いますが、私はかわいくない生徒でした。

＜例5＞(外人)「まじめなケガをしました」。私はいくら考えても分からないので英語で言ってもらったところ、”serious disease”でした。要するに「重大なケガ」と言いたかったようです。これは普通分からない、見当もつかないですよ。推論の及ばない世界でした。

＜例6＞(女性)「今生理中で調子が悪いのよ」。男の私はおおよそ実感できませんでした。やはり推論の外側にあります。もっとも専門の医者は、実感とまではいなくても聞き取りで推測して、適切な薬を処方できます。

＜例7＞(私、問い1)「どうして目が大きいとかわいく見えるのでしょうか」。(回答者)「あなたをじっと見つめているように見えるからです」。この回答に私はまだ半分しか納得できていません。ならばどうして鼻や口が大きいとかわいくないのでしょうか。(私、問い2)「どうして鼻の穴は2本あるのですか」。(回答者)「2本だと予備があって安全でしょう」。(再度私)「そういう理由なら、鼻の穴が3本で口が2つの方がもっと安全ではないでしょうか」。これって推論のしすぎかな、自分では良問だと思っているのですが。

瞑想録(その17)

＜例8＞(嫁)「今夜の夕飯は何にしようかしら」。(私)「今日電気釜を新調するのでしよう。だったら料理集がついてくるだろうから、それを見ればよいよ」。ここで「料理集がついてくる」はあくまでも蓋然推論です。ここでの手柄と言うか全体推論は、嫁様が別個の行為と思い込んでいた、今夜の献立と電気釜の新調と言う2つの行為を一体化したところです。

＜例9＞(親)「遊んでばかりいると勉強ができなくなりますよ」。(子)「違うよ、勉強ができないから遊んでばかりいるのだよ」。これだけ気が利いた言い返しができるなら、この子は決してバカではありません。

＜例10＞(子)「カタストロフィーって何」。(親)「大事故のことよ」。国語辞典における言葉の説明もほぼこんなものです。近くてわかりやすい言葉で説明しておいて、受けるほうはそれを近似値としてあとは実践と経験で真の意味を推論調整して、正しい位置にもっていきます。

＜例11＞(子)「風呂の水を捨てる」と流すとどう違うの」。(親)「捨てるは風呂の栓を抜くだけで、流すはそのあとさらにごみや髪の毛の水で流すことよ」。親の「流す」の説明は厳密にはトートロジーになっていますが、意味は通じるでしょう。ここは「捨てる」と「流す」、一般的な意味は明らかに違うのですが、ことが具体的に風呂に関してだと両者が接近してしまいます。その接近したところの微妙な使い分けを、親は説明しています。

＜例12＞(親)「手間暇かけるなよ」。(子)「手間はかけているけれど暇なんかかけていないよ」。子供の反論ももつともです。要するに「手間暇」と言う言葉の「暇」が、本来の意味を若干離れて韻を踏んでいる面が強調されている例です。似た例に「味噌くそ一緒」や”Jesus is the reason for the season.”(クリスマスのこと)があります。

＜例13＞(学生)「条文で譲渡と言っても有料だし善意と言っても慈善をしていないのですが」。(先生)「法律用語で譲渡は売り渡し、善意は無知であったことを言います」。普段語の特定分野的な用法は、変だと思ったら推測して先達に尋ねた方が良いです。

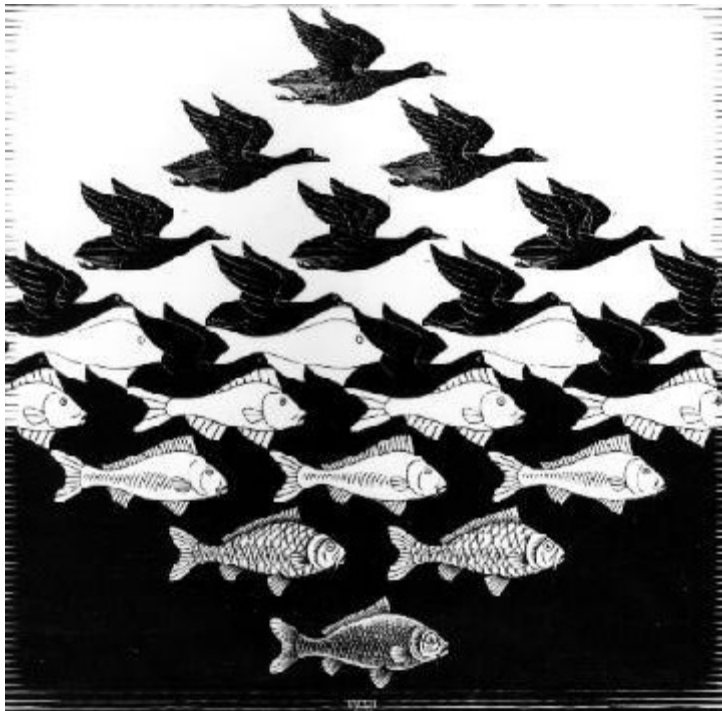
本日は推論プロセスと、併せて言葉の示す領域の見当の付け方を見ました。ここでもやはり論理よりも経験が勝っています。またそれぞれの推論プロセスにおける知恵の入れ所は一般則がなくて、ひたすら勘の良さが試されます。

24、市松模様関連の構造

先日日本に特徴的な市松模様(チェッカー)の基本パターンとそのバリエーションを示したが、今日はそれらを構造的にまとめてみる。手始めとして原点に当たる市松を、「1cm四方の正方形が白黒交互に4つ合わさった形」とする。

この原点を基本にバリエーションとして、①四角の大きさ、②白黒は別の色、③縦横でなく斜め交差の3つをまず挙げよう。ところがこれらは、大きさだったら「何倍か」と言う数字つまり1次元で、色だったら色環と言うループはするが1次元で、そして斜め交差だったらその角度と言う数字1次元で示せるので、結局構造と言ってもデジタル有限次元の線形空間で表現できることになってしまう。

ところがここで「四角形の辺を直線でなく波打たせる」と言うバリエーションを考えると、波の打ち方はもし数えれば無限種類あるのでもはや線形多次元空間では表現しきれない。その極まったものがテッセレーションとしての鳥や魚にまで至ることを思えば(下図)、それは明らかである。



この例の意味するところは、絵画は元より文様の繰り返しの中の最も単純なものを例にとっても、それに関連するバリエーションの構造は従来の線形座標では表現できないということだ。そもそもアナログ空間論は連続的構造を「無限個の点の集合」ではなくて「基本形がそもそも連続」として見るのだ。だからこの見地からは今日の基本の市

瞑想録(その17)

松模様を、原点を真ん中にその周辺に「大きさ」、「色」、「角度」、「辺の形」と言う4つの衛星的アナログ集合が取り巻いていると見た方が、脳の働きに照らし合わせても自然である。

このように見た時には「大きさ」から「辺の形」までの4集合は基本的であるという理由でこれらを「アナログ数字」とみなすことができる。しかもこれらは「点」とか「集まり」と言うよりもむしろ原点なりに作用して新しいものを生み出す「作用素」(エージェント)と見た方が実態に合っている。例えば原点に「色」と「角度」の両方が作用すると、ひし形格子を互い違いにオレンジ色と黄緑色に染めると言った「新市松」が生成されるわけである。

この調子で行くと先日の「市松模様」の記事で挙げた色々なバリエーション、例えば基本単位に「春夏秋冬」と意味関連の4漢字を入れ込むとか、どんぶりの周りに市松を並べていくと言ったパターンもそれぞれ、「漢字入り」とか「極座標」と言った形で、名称つまり「アナログ数字である作用素」を陽に定義することができる。さらにグラデーションとか背景化の上で法相華の模様を描くと言ったバリエーションも、「傾斜」とか「背景化」と言った名前を付けての作用素となる。

ここでこれらの名前の意味するところはもちろん1種類でない。「傾斜」と言っても様々なグラデーションの付け方がありその味わいは微妙に異なる。その個々のグラデーションは「市松空間」とでも呼ぶべき超空間のとある一点かもしれないが、これらを一々数え上げてはおよそ收拾のつかない揺らぎを超えた世界に、我々は今直面しているのである。

さらにこれらの基本単位であるアナログ数字であるが、順序も大小もつけられないものの、「背景化」に比べて「大きさ」の方が明らかに変形の具合が小さくてより原点の名残をとどめている。その意味で「大きさ」の方が「背景化」よりも原点に近いとは言えるのである。そして「背景化」程遠くなるとそろそろそのデザインは、「市松大集合」と「法相華大集合」の境界にあって、場合によっては「法相華大集合」の方に入れた方が適切ともなる。

また先の「辺の形」集合であるが、ちょっとした波型と「鳥と魚」を一括りにするには大きすぎて一単位とは思えないと覚えることもあるだろう。その場合には「辺の形」を分けて、「辺の曲線化」と「辺による形象化」に分けても良いのである。このようにアナログ数字(作用素)の設定の仕方は一通りではない。

瞑想録(その17)

先の「市松模様」の記事ではさらに視点を変えて、市松をその中身でなく辺に注目して見えてくる「格子模様」やほとんど立涌模様に見えるような「立涌遷移」と言った、非自明で気づきに飛躍や視点の変更を促すような方向への変位も例に挙げた。実際これが完全に転化してしまった後は「市松大集合」とは別の集合と見た方が良いのであるが、その萌芽、気づきの初めにおいては原点に近いところの「境界作用素」と位置づけられるであろう。このようにアナログ空間における位置関係はダイナミックである。

この例で注目してほしいのは、「大きさ」や「角度」が原点に近いアナログ数字だとしても、それらはデジタル整数のように整列していて割り込めないのではなく、逆にいくらでも割り込めるし、そういう割り込みに気づくことこそが新奇的なデザインを生成する芸術家的な知恵なのだ。

今までの学問はデジタル数字の上に立脚しているので、厳密であってかつ四則演算も導入できる代わりに、新奇的な物の出ようがなく堅物すぎてつまらないところがあった。ところがアナログ集合の世界ではいくらでも知恵によって新しく面白い割り込みができるのだ。ちょうどアイスクリームと言えば「冷たいがなめると解ける塊」だと思い込んでいたところに、トルコのねばねばアイスとかあるいはアイスの天ぷらを見せられて驚くようなものだ。

アナログ的な物の味方のだいご味は、このそれまでの常識を打ち破るような新奇的な形に気づく余地が結構あるところだ。アナログ数字については以前に「山水画」を例に挙げたが、本日アナログモデルがもう一つ増えた形になる。

2017. 01. 03